

文化の外部性からみた瀬戸内国際芸術祭

狭 間 恵三子

はじめに

人口減少、少子・高齢化の急速な進展の影響等により、多くの地域で過疎化や地盤沈下が進んでいる。人口減少により地域のコミュニティや伝統・文化の衰退まで懸念される状況にある。そのような中で、近年、日本各地において文化芸術を活かした地域振興が注目されている。地域活性化の方向性がハードからソフトへ転換する中で、アーティストと地域を巻き込む芸術祭も数多く生まれている。

2000年に新潟県の越後妻有地域で大地の芸術祭、2001年に横浜トリエンナーレが始まると、日本各地で「芸術祭」と呼ばれるアートイベントが開催されるようになる。日本の芸術祭は、大地の芸術祭のように農山村や離島で開催される地域型芸術祭と、横浜トリエンナーレに代表される都市型芸術祭に大きく分けられるが、過疎・高齢化が進む農山村や離島で、現代アートを活かして地域を元気づける地域型芸術祭は、日本独特のものである。自然や歴史、生業、食など地域の伝統的な文化と現代アートというミスマッチともいえる出会いを通して地域を刺激し、その魅力を顕在化し、人々の交流を生み出し、地域を活性化させる試みである。

筆者は、以前ミュージアムの果たす役割を文化の外部性、公共性の視点から考察し、「ミュージアムの公共性についての一考察 ―公共性議論と文化の外部性から―」と題する拙稿を草した¹⁾。ミュージアムがその活動を社会に開いていき、地域の文化活動に関わる多様な人々や享受者を結びつけ、文化の社会的循環を可能にしていくことの意義、そのための方策を探ることを試みたものである。その結果、文化施設の公開性と相互コミュニケーションの展開が、人々の文化芸術に対する享受機会の増加のみならず、地域社会を活性化させる可能性を有することについて示唆を得ることができた。

本稿は、これまで5回の開催を重ねる瀬戸内国際芸術祭が、地域や住民にもたらした変化を、文化の外部性という視点から検証し、芸術祭が地域社会に果たす役割・意義について考察する

ものである。

1. 瀬戸内国際芸術祭の概要

2010年7月19日から10月31日までの105日間、「第1回瀬戸内国際芸術祭」が、備讃瀬戸の直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島といった島々、そして高松港周辺を会場として開催された。「アートと海を巡る百日間の大冒険」と名付けられたこの芸術祭は、「海の復権」をテーマに掲げ、島々の自然にアートを配し、来場者が瀬戸内海の島々を船で巡りながら、アートとともに、自然や食、島の人との交流を楽しむものである。18の国/地域から75組のアーティスト・プロジェクトが参加し、16のイベントが行われた。当初見込みの30万人を遥かに超え、約93万8,000人が来場した。



(図1) 瀬戸内国際芸術祭2022会場
(出典：瀬戸内国際芸術祭実行委員会)

文化の外部性からみた瀬戸内国際芸術祭

その後、3年に1度開催され、第2回からは、会期を春、夏、秋に分け、香川県中西部の沙
 弥島、本島、高見島、粟島、伊吹島と岡山県の宇野港周辺が加わった。

2019年第4回目には、瀬戸内海の12の島々と2つの港周辺を舞台に、春、夏、秋会期で計
 107日間開催され、過去最高の118万人の来場者を迎えた。32の国・地域から230組のアーティ
 スト・プロジェクトが参加し、214作品が出展され、35のイベントが行われた。海外からの来
 場者の割合が23%となり、国際芸術祭を名乗るに相応しい芸術祭となった。

2022年第5回も12の島と高松、宇野両港周辺を会場に、春、夏、秋、計105日間開催された。
 参加アーティスト・プロジェクトは33の国/地域から188組。213作品が出展され、19のイベン
 トがあった。新型コロナウイルス感染症の影響で、前回は来場者の4分の1を占めた外国人

(表1) 第1回から第5回までの瀬戸内国際芸術祭の概要

名称	(第1回)芸術祭2010	(第2回)芸術祭2013	(第3回)芸術祭2016	(第4回)芸術祭2019	(第5回)芸術祭2022
テーマ	海の復権	海の復権	海の復権	海の復権	海の復権
シーズンテーマ、 重点的な取り組み等	「アートと海を巡る百日間の冒険」	「アートと島を巡る瀬戸内海の四季」	「海でつながるアジア・世界と交流」「瀬戸内の「食」を味わう「食プロジェクト」」「地域文化の独自性の発信」	「瀬戸内の資源×アーティスト」「アジアの各地域×瀬戸内の島々」「島の「食」×アーティスト」「芝居・舞踏の多様な展開」	「瀬戸内の里海・里山の隠れた資源の発掘と発信」 「国内・世界とのつながりの継続、より質の高い交流の転換」 「瀬戸内の魅力を発信していく「食」の充実・強化」 「持続可能な社会の実現に向けた取り組みの推進」
会期 (会場日数)	7.19-10.31 (105日間)	春: 3.20-4.21(33日間) 夏: 7.20-9.1(44日間) 秋: 10.5-11.4(31日間) (計108日間)	春: 3.20-4.17(29日間) 夏: 7.18-9.4(49日間) 秋: 10.8-11.6(30日間) (計108日間)	春: 4.26-5.26(31日間) 夏: 7.19-8.25(38日間) 秋: 9.28-11.4(38日間) (計107日間)	春: 4.14-5.18(35日間) 夏: 8.5-9.4(31日間) 秋: 9.29-11.6(39日間) (計105日間)
会場	8会場 直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島、高松港周辺	14会場 直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島、沙弥島(春)、本島(秋)、高見島(秋)、粟島(秋)、伊吹島(夏)、高松港周辺、宇野港周辺	14会場 直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島、沙弥島(春)、本島(秋)、高見島(秋)、粟島(秋)、伊吹島(秋)、高松港周辺、宇野港周辺	同左	同左
参加アーティスト・プロジェクト数	18の国/地域、75組	26の国/地域、200組	34の国/地域、226組	32の国/地域、230組	33の国/地域、188組
アート作品数	76点	207点	206点	214点	213点
イベント	16イベント	40イベント	37イベント	35イベント	19イベント
来場者数(人)	938,246	1,070,368 春: 263,014 夏: 435,370 秋: 371,984	1,040,050 春: 254,284 夏: 401,004 秋: 384,762	1,178,484 春: 386,909 夏: 318,919 秋: 472,656	723,316 春: 228,133 夏: 187,483 秋: 307,700
作品鑑賞 チケット販売数	88,437枚	92,475枚	84,208枚	100,985枚	59,177枚
収入(3カ年)	8.0億円	11.8億円	13.9億円	13.2億円	12.8億円
支出(3カ年)	6.9億円	10.2億円	12.4億円	12.3億円	12.0億円
経済波及効果※	111億円	132億円	139億円	180億円	103億円

※経済波及効果の計算は2010は日本銀行高松支店、2013は日本政策投資銀行と瀬戸内国際芸術祭実行委員会、2016、2019、2022は日本銀行高松支店と瀬戸内国際芸術祭実行委員会の共同試算。香川県産業連関表等を用いて推計。

(出典: 各回総括報告より筆者作成)

が激減した。国内の観光客も減り、来場者数は72万3316人とどまり、最多だった2019年の61.4%に縮小した。港や会場に検温スポットを設置し、室内の展示会場には換気用のサーキュレーターを備え付けるなど、徹底的な感染対策が取られ、懸念していた島民への影響や混乱はなく、無事閉幕した。

第1回から第5回までの瀬戸内国際芸術祭の概要は、表1²⁾の通りである。

2. 瀬戸内国際芸術祭の開催経緯

瀬戸内国際芸術祭の主催者は、瀬戸内国際芸術祭実行委員会である。第1回の実行委員会の構成団体は(表2)のとおりである。会長は香川県知事、副会長は香川県商工会議所連合会会長と高松市長、総合プロデューサーに福武總一郎氏(財団法人直島福武美術館財団理事長)、総合ディレクターに北川フラム氏(女子美術大学美術学部教授)が就いている。構成団体は、関係自治体、(財)直島福武美術館財団、四国経済産業局、香川大学をはじめとする教育機関、県内関係団体等が名を連ねている。

(表2) 第1回(2010年)瀬戸内国際芸術祭実行委員会の構成団体

瀬戸内国際芸術祭実行委員会	
会 長	: 香川県知事 浜田恵造
名誉会長	: 前香川県知事 真鍋武紀
*1	
副 会 長	: 香川県商工会議所連合会会長 竹崎克彦*2
	: 高松市長 大西秀人
総合プロデューサー	: 福武總一郎((財)直島福武美術館財団理事長)
総合ディレクター	: 北川フラム(女子美術大学美術学部教授)
構成団体	: 香川県、高松市、土庄町、小豆島町、直島町、(財)直島福武美術館財団、(財)福武教育文化振興財団*3、香川県市長会、香川県町村会、四国経済産業局、四国地方整備局、四国運輸局、国立療養所大島青松園*4、四国経済連合会、香川県商工会議所連合会、香川県商工会連合会、(社)香川経済同友会、香川県農業協同組合、香川県漁業協同組合連合会、(株)百十四銀行、(株)香川銀行、香川大学、四国学院大学、徳島文理大学、高松大学、香川県文化協会、(財)四国民家博物館、(社)香川県観光協会、(社)日本旅行業協会中国四国支部香川地区会、(財)高松観光コンベンション・ビューロー、香川県ホテル旅館生活衛生同業組合、四国旅客鉄道(株)、高松琴平電気鉄道(株)、香川県旅客船協会、(社)香川県バス協会、香川県タクシー協同組合、(財)香川県老人クラブ連合会、香川県婦人団体連絡協議会、(社)日本青年会議所四国地区香川ブロック協議会、香川県青年団体協議会、さめき瀬戸塾[オブザーバー]
	: 岡山市、玉野市*5、岡山県商工会議所連合会、岡山大学
*1	平成22年10月14日から
*2	平成22年11月1日から
*3	平成21年3月20日(第3回総会)から
*4	平成22年3月30日(第5回総会)から
*5	平成20年11月11日(第2回総会)から
45団体(うちオブザーバー参加:4団体)	

(出典：2010総括報告より)

第1回開催時の会長である真鍋武紀知事が、香川県知事に就任したのは1998年9月7日である。バブル経済が崩壊し、バブル期以降続いていた大型事業の建設投資が嵩み、1997年度末の県債残高は5072億円に達していた。県の財政再建が喫緊の課題であった。長く住民と県の深刻な対立が続いていた豊島産業廃棄物問題も、解決の道筋が見えず、膠着していた。この問題は、1978年、香川県が土庄町豊島の豊島総合観光開発に産業廃棄物処理業の許可を出したことに端を発する。豊島総合観光開発は、1970年代後半から1990年にかけてシュレッダーダストや廃油、汚泥等の産業廃棄物を収集し、処分地に大量に搬入して野焼きなどを続けていた。島民への健康被害や農業、漁業など地場産業への悪影響が甚大であった。豊島住民は、県が責任を認めたくらうて原状回復することを求め、国に公害調停を申請していた。

真鍋知事は、県財政の立て直しに注力する一方、豊島問題の解決を県政の最重要課題に掲げた³⁾。37回の調停を経て2000年6月6日、知事が公害調停で謝罪し、ようやく原状回復の合意が成立した。

豊島の産廃問題解決に取り掛かっているときに、真鍋知事は株式会社ベネッセコーポレーション代表取締役会長（当時）の福武総一郎氏に会う。福武氏は、1992年に直島コンテンポラリーアートミュージアム（現ベネッセハウスミュージアム）を開設し、1998年には空き家となっていた民家などと現代アートを融合させた「家プロジェクト」をスタートさせていた。「現代アートで直島を元気にしたい」とさまざまな活動を進めていたが、「それを瀬戸内海の他の島にも広げたい」と知事に語った。この出会いが瀬戸内国際芸術祭の開催につながっていく。

一方、香川県庁では、若手職員を育成するために「職員政策研究」を実施していた。2004年、若手の職員グループが瀬戸内の島々を舞台にした国際美術展「アートアイランドトリエンナーレ」開催を含む政策を知事に提言した。

こうして香川県庁の動きとベネッセアートサイト直島の活動が一つになっていく。福武氏が「大地の芸術祭のようなアート活動を瀬戸内でやりたい」と、北川フラム氏を連れて真鍋知事に会いに行ったのは、2007年4月である。

その頃香川県は、ある工場誘致に力を入れていたが、その案件はマレーシアに負けてしまう。工場誘致は、アジア近隣諸国との競争になっており、資源や労働力などの面から一地方自治体では到底叶わなくなっていた。真鍋知事は、「これからは、工場誘致などのハードな経済振興をある程度卒業し、ソフトに注目する、つまり芸術文化を活かした地域振興が大切になると考えた」と言う⁴⁾。

2007年9月の香川県議会定例会で、知事が瀬戸内国際芸術祭の開催を表明し、2008年3月、

香川県当初予算に瀬戸内国際芸術祭推進事業が計上された。同年4月、瀬戸内国際芸術祭実行委員会を設立、開催に向けて本格的に準備がスタートした。

3. 瀬戸内国際芸術祭による地域の変化

2010年に始まった瀬戸内国際芸術祭は、「海の復権」をテーマに、瀬戸内の島に活力を取り戻し、すべての地域の「希望の海」となることを目指して始まった。少子高齢化と過疎にある島の人々、今も島に住み静かに暮らしを紡いでいる人々を元気にしたい、瀬戸内の島に活力を取り戻したい、ということが芸術祭の発意であった。

作品のある「場所」はどういうところか。周囲にはどのような風景が広がり、場所と歴史、人の営み、生業とはどのようなかわりがあるのか。それをアートを通して

明らかにする。サイト・スペシフィック・アート⁵⁾を設置することで、改めて地域に目を向け、島が持つ豊さに気づき、その再興を考える。見えてくるのは、島の豊かな自然や郷土料理、伝統的な町並みなど美しい面だけではない。離島という条件のもとに、犬島や直島では銅の精錬所など煙害をもたらす工場が建設され、大島はハンセン病患者を隔離するための療養所として使われた。長年産業廃棄物の不法処理に苦しめられた豊島もそのひとつである。近代化の負の遺産にも向き合い、そこから将来を考えることも、瀬戸内芸術祭開催の意義である。

これまで5回を数える瀬戸内芸術祭は地域に何をもたらしたのか。2010年から2022年、5回を数える瀬戸内国際芸術祭の歩みをデータで概観する。

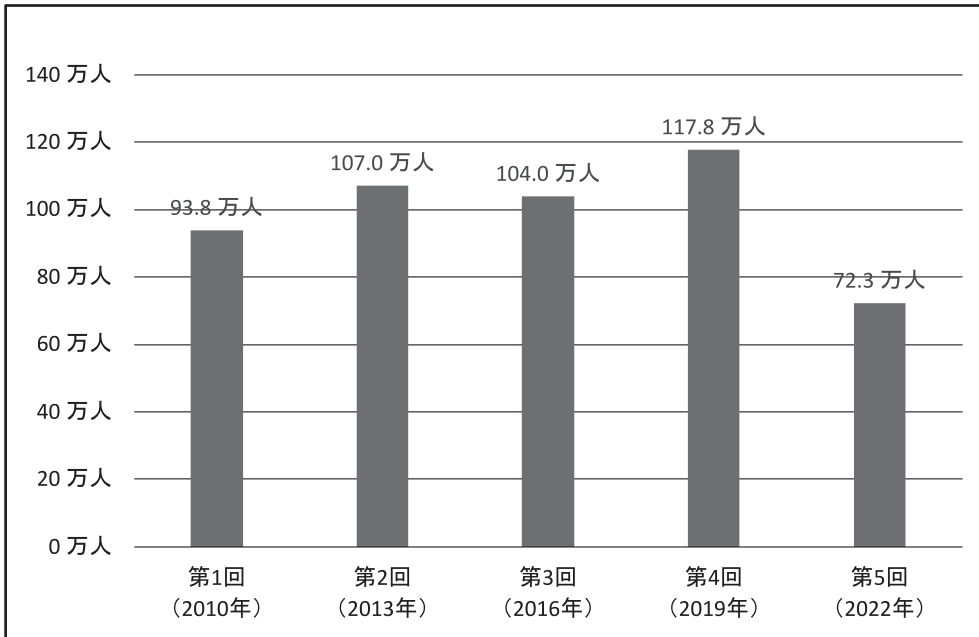
来場者の推移

第1回から第5回瀬戸内国際芸術祭までの延べ来場者の推移は図2の通りである。2019年第4回が最高の来場者数で、118万人に達している。

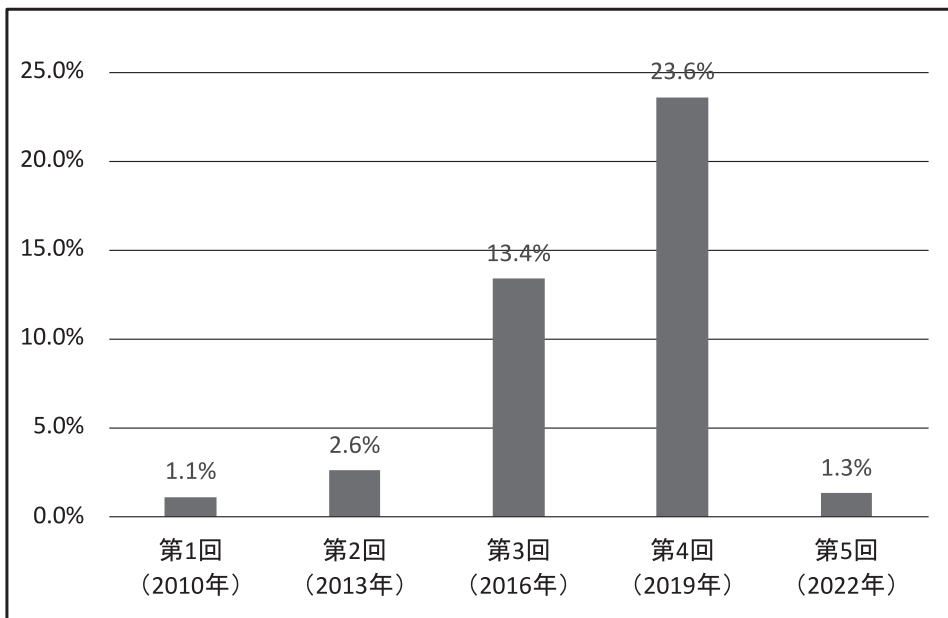


(写真1) 1909年にハンセン病の療養所が設置された大島。芸術祭を機に「大島振興方策」が策定され、一般旅客定期航路が開設された。
(筆者撮影)

文化の外部性からみた瀬戸内国際芸術祭



(図2) 来場者数の推移
(出典：各回総括報告より筆者作成)



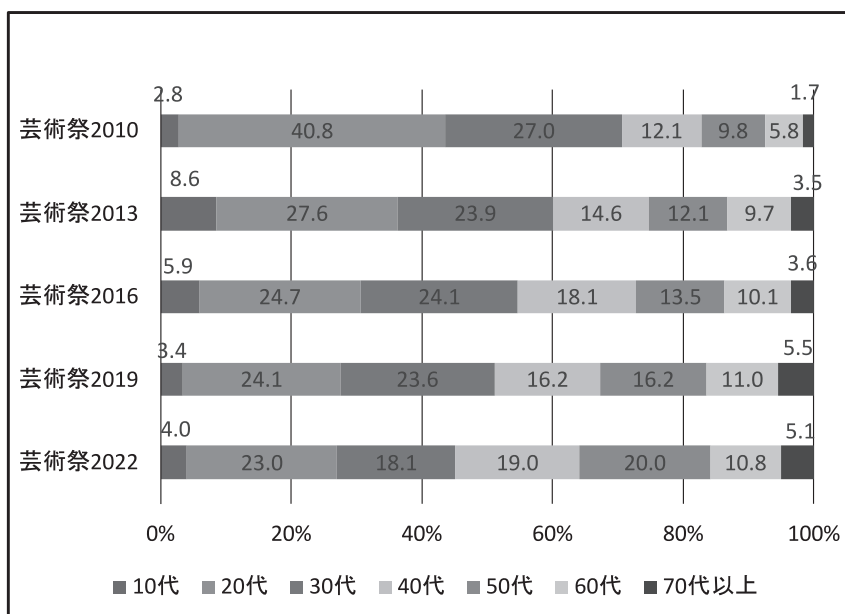
(図3) 外国人来場者の割合の推移
(出典：各回総括報告より筆者作成)

2022年第5回芸術祭は、新型コロナウイルス感染症の影響下で実施された。移動の制限や徹底的な感染防止対策を講じながらの開催であった。海外からの来場が難しくなり、第4回(2019年)の来場者117万8484人を39%下回り、72万3316人となり、初回開催以来最少であった。会場別では、香川県・直島が16万6737人(前回比45%減)で来場者が最も多く、続いて小豆島12万3382人(同34%減)、豊島9万7391人(同32%減)、高松港周辺6万2131人(同39%減)の順だった。新型コロナウイルスの水際対策が緩和された10月中旬以降、外国人来場者の姿が見受けられたが、増加はごく一部にとどまった。

第4回までは、外国人来場者は増加していた。外国人の割合(来場者アンケート回答者ベース)は、第1回1.1%、第2回2.6%、第3回13.4%、第4回23.6%と着実に増え、2019年は来場者の4分の1を外国人が占めるまでになった。海外からの渡航が制限された第5回の外国人の割合は1.3%である。

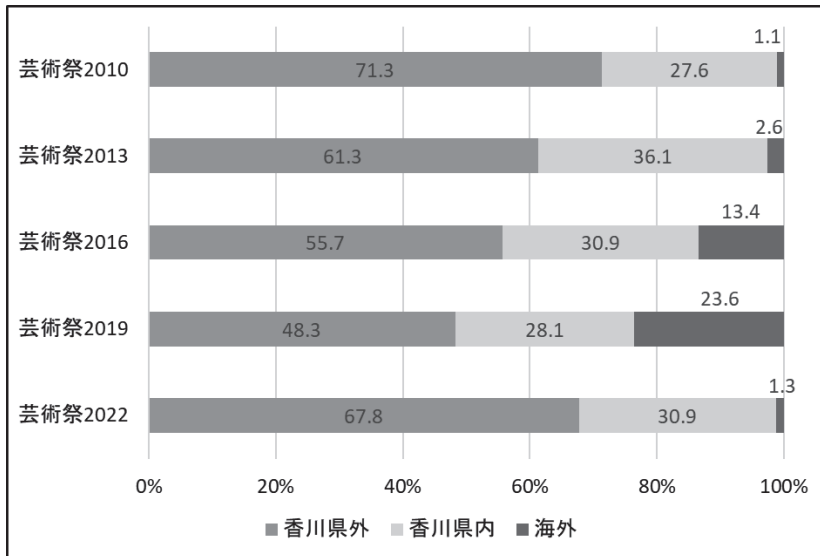
来場者の属性

来場者の属性は、回を追うごとに少しずつ変化している。来場者の年齢層の推移、来場者の居住地域の推移は、図4、図5の通りである。



(図4) 来場者の年齢層の推移
(出典：各回総括報告より筆者作成)

文化の外部性からみた瀬戸内国際芸術祭



(図5) 来場者の居住地の推移

(出典：各回総括報告より筆者作成)

2010年第1回の芸術祭では、来場者は30代以下が70%を占めた。最多が20代の女性だった。それが回を重ねるごとに、来場者は多世代に広がっている。2022年第5回では、各年代、ほぼ均等に来訪するようになった。

来場者の居住地も、広がっている。新型コロナウイルス感染症で移動規制が厳しかった第5回を除けば、香川県外、香川県内、海外がほぼ3分の1ずつに近くなってきた。

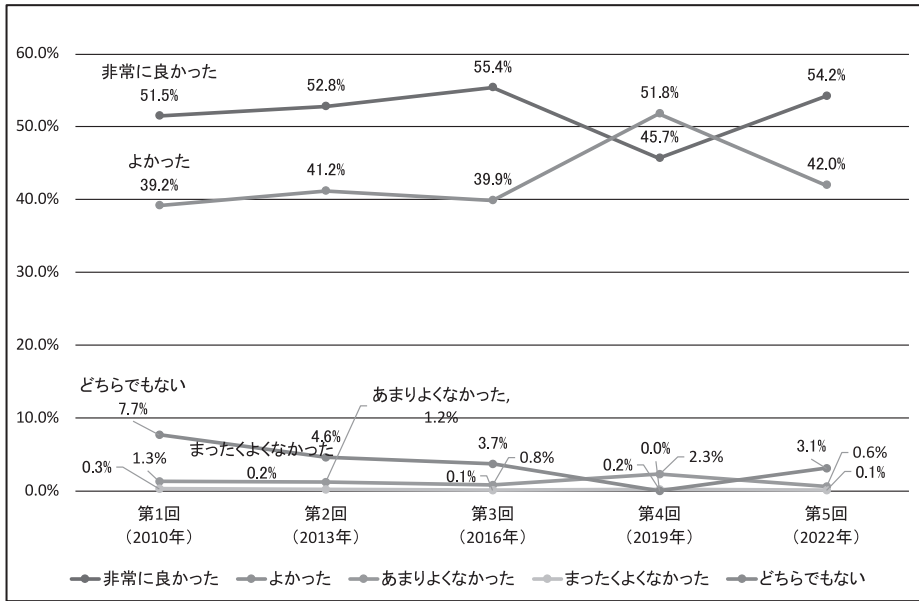
来場者の年代や居住地の広がりや、瀬戸内国際芸術祭の間口の広さを示している。

芸術祭に対する評価

瀬戸内国際芸術祭実行委員会は、毎回来場者を対象にアンケート調査を実施し、芸術祭に対する満足度や再訪意向を調べている。

芸術祭に対する評価は総じて高い。第1回2010年(N=11476)の調査では、「作品について」の評価は、良い(65.3%)、まあまあ良い(28.4%)を合計すると93.7%だった。芸術祭全体の総合評価も、良い(51.5%)、まあまあ良い(39.2%)が計90.7%に達した。

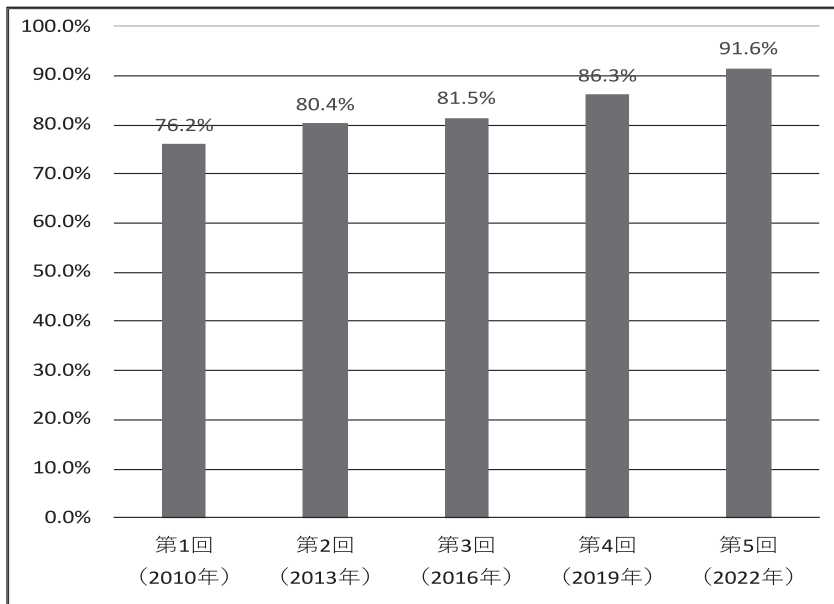
2回目以降も芸術祭に対する総合評価は高い。2013年(N=17297)は、とても良い(52.8%)、まあ良い(41.2%)が計94%。2016年(N=15336)は、とても良い(55.4%)、まあ良い(39.9%)の合計95.3%。2019年(N=6857)も、非常によかった(45.7%)、よかった(51.8%)が計



(図6) 芸術祭に対する来場者の評価の推移

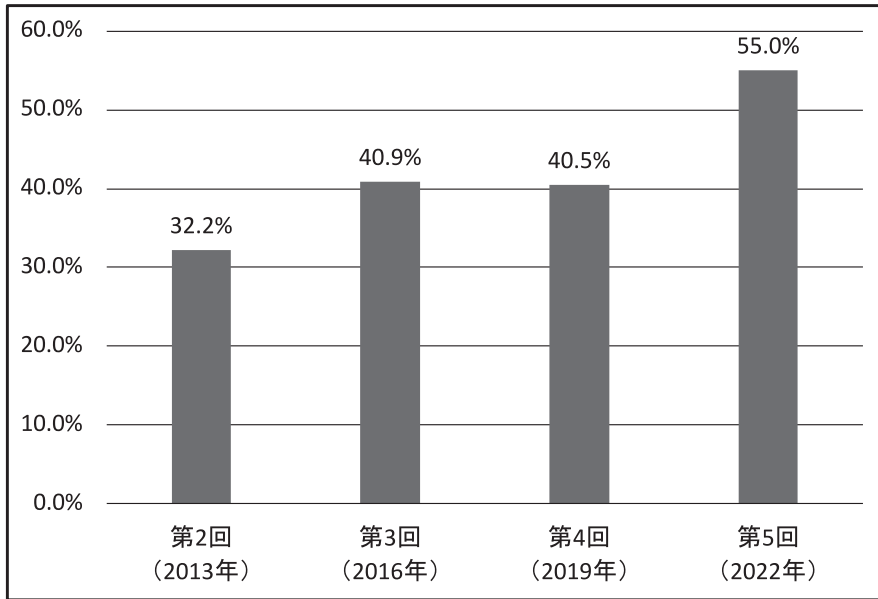
(出典：各回総括報告より筆者作成)

注：年によってアンケートの選択肢の言葉は微妙に異なる。2019年は「どちらでもない」にあたる選択肢がない。



(図7) 再訪意欲 (次回芸術祭に「ぜひ来たい」+「来たい」) の推移

(出典：各回総括報告より筆者作成)



(図8) 来場者におけるリピーターの割合の推移
(出典：各回総括報告より筆者作成)

97.5%に達した。新型コロナウイルス感染下で行われた第5回2022年(N=12462)でも、非常によかった(54.2%)、よかった(42.0%)という評価が計96.2%であった。

アンケート調査では、来場者の再訪意欲の高さも示された。次回の芸術祭に、「ぜひ来たい」「来たい」と答えた人の割合は、第1回(2010年)76.2%、第2回(2013年)80.4%、第3回(2016年)81.5%、第4回(2019年)86.3%だった。第5回(2022年)では91.6%に達した(図7)。

実際に来場者のリピーター率は高い。第2回(2013年)では、リピーターが全体の32.2%、第3回(2016年)は40.9%、第4回(2019年)40.5%、第5回(2022年)は55.0%となっている(図8)。

瀬戸内国際芸術祭は、回を重ねるごとにリピーターを増やし、来場者の半数が固定的なファンに育っている点が特徴的である。

再訪の理由

実行委員会が実施している来場者アンケートでは、再訪の目的等を問う質問はないが、香川大学教授・原直行氏および共同研究者らが、豊島を対象に継続的な来場者調査を実施している⁶⁾。来場者の属性、訪問目的、訪問施設・場所、印象に残っている施設・場所、地域資源の認知、滞在満足度、再訪意向を聞いている。2013年の調査(N=367)では、来場者の3分の2が初

めて豊島を訪問し、訪問目的は、「アート作品」（複数回答：回答数339）、次に「建築」（複数回答：回答数137）、3番目は「芸術祭のパスポートがあった」（複数回答：回答数97）、「島の自然」（複数回答：回答数78）、「食事」（複数回答：回答数28）の順だった。

アンケート回答者で再訪意欲のある回答者（「ぜひまた訪れたい」45.5%、「機会があれば訪れてもいい」48.3%）には、再訪目的を尋ねている。「ぜひまた訪れたい」人の再訪目的は、「アート」「建築」「島の自然」「食事」。「機会があれば訪れてもいい」人では、「アート」「島の自然」「建築」「食事」と続く。当初の来場目的と比較すると、再訪の場合「島の自然を観に」の回答が高くなる。「島の人との交流」も、当初よりも再訪時でやや増加する。

2019年の調査（N＝日本人394、外国人121）では、日本人の訪問目的は「瀬戸内国際芸術祭を見る・参加する」（複数回答：回答数280 比率71.1%）、「アート作品（美術館）を観る」（複数回答：回答数222 比率56.3%）、「自然景観を見る」（複数回答：回答数141 比率35.8%）、「自然の豊かさを体験する」（複数回答：回答数54 比率13.7%）、「美味しいものを食べる」（複数回答：回答数53 比率13.5%）の順だった。同じ質問を外国人にもしているが、訪問目的は「アート作品を観る」（複数回答：回答数80 比率66.1%）、「瀬戸内国際芸術祭を見る」（複数回答：回答数79 比率65.3%）、「自然景観を見る」（複数回答：回答数49 比率40.5%）、「美味しいものを食べる」（複数回答：回答数32 比率26.4%）だった。外国人は食への関心がやや高い。しかし、瀬戸内国際芸術祭と自然が、重要な訪問目的になっていることは共通している⁷⁾。

瀬戸内国際芸術祭は、12島と2港が会場である。多くの国/地域から多様な作品が出展され、一回の訪問ではまわり切れない。芸術祭開催中に複数回訪れる人もいるが、訪問経験のない島への訪問や、まだ見ていない作品の鑑賞を次の芸術祭の目的とする場合もあるだろう。毎回、異なったイベントも催される。種々のワークショップも開催される。

作品の中には、芸術祭期間中だけの展示ではなく、恒久設置されるものがある。同じ作品を再訪するのも楽しみとなる。自然の中で、作品は色を変え、質感を変える。錆が浮かび、それが作品の重量感を増す。作品の裂け目から草が生えていることもある。作品を通して、時の移ろいを実感する。



(写真2) 青木野枝「空の粒子/唐櫃」（豊島）
空に粒子が舞うかのように円形の彫刻をつなぎ合わせた鉄の作品は、年月を経て錆が濃くなり周囲に溶け込んでいく。（筆者撮影）

瀬戸内海という自然の魅力も大きい。島の佇まい、景観は季節や1日の時間帯により、温度も湿度も風も光も異なり、その色を変え、趣を変える。

瀬戸内国際芸術祭にリピーターが多いのは、何度訪れても、新しい発見があるためであろう。そこに「思い出を旅する」安堵感が加わる。

住民の評価

過去5回の芸術祭を、島の住民はどのように評価しているだろうか。実行委員会は、毎回、作品を設置した島の住民を対象に、アンケート調査を実施している。2010年第1回芸術祭会期後のアンケート調査(N=513)では、開催前と開催後で、住民の評価に変化が見られる。

開催前には、地域活性化に対する期待は「大いに期待していた」25.7%、「少しは期待していた」42.8%、「あまり期待していなかった」24.9%、「全く期待していなかった」6.6%である。開催後は、「大いに役立った」36.3%、「少しは役立った」46.1%、「あまり役に立たなかった」12.7%、「全く役に立たなかった」4.9%に変化した。開催前には、芸術祭に対する期待度が68.5%に対し、開催後は82.4%にアップした。自分の地区に作品が設置され、「たいへん良かった」42.9%、「まあまあ良かった」45.4%と、88.3%の人が地区に作品が設置されたことを評価していた。

「芸術祭は成功だったか」という質問に対しては、「大成功だった」48.7%、「まあまあ成功だった」45.1%と、93.8%の島民が評価していた。次回も「ぜひ開催して欲しい」46.4%、「どちらかといえば開催して欲しい」37.7%で、84.1%が次回開催に肯定的であった。来場者のマナーについては、20%が「良くなかった」と回答し、33%が「芸術祭の開催で、日常生活に迷惑や負担を感じた」と回答している。

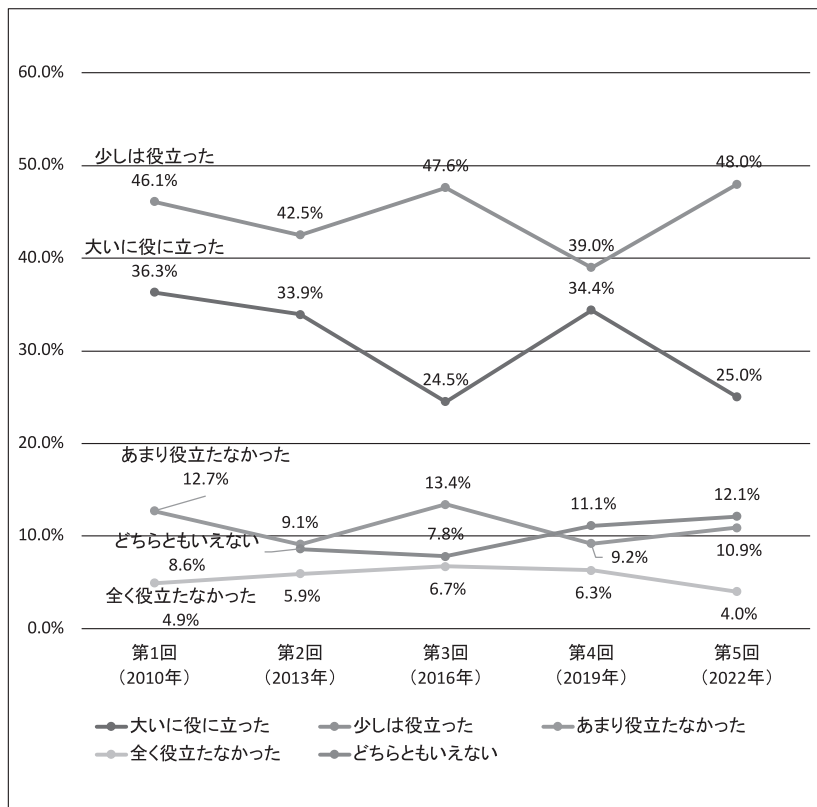
5回の芸術祭に対する住民の評価（地域活性化に役立ったか、次回も開催してほしいか）の推移は、図9、図10の通りである。

実行委員会は、会期終了直後からすべての島で自治会をはじめ島民との意見交換会を開催している。第1回芸術祭開催後の肯定的な意見は以下の通りである⁸⁾。予想をはるかに上回る多くの若い人が島を訪れ、島民は来訪した若者との交流を楽しみ、元気をもらったという声が多



(写真3) 三宅之功「はじまりの刻」(小豆島) 陶でできた卵の割れ目から植物が自生する。

(筆者撮影)



(図9) 住民の評価（地域活性化に役立ったか）の推移

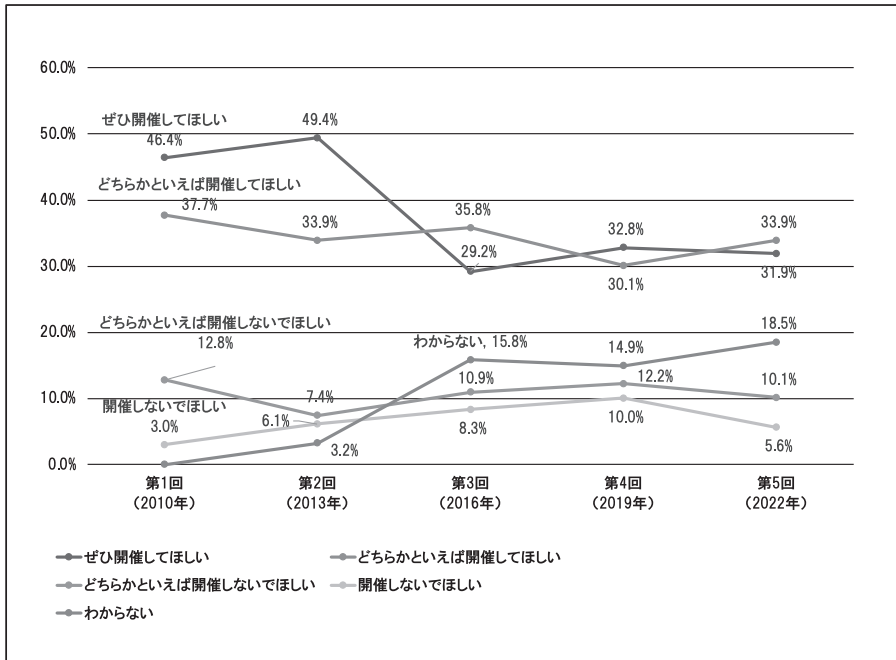
(出典：各回総括報告より筆者作成)

注：2010年には「どちらでもない」にあたる選択肢がない。

い。島を多くの人に知ってもらったことを喜んでいた。

- ・ 島民の関心が高く、掃除の共同作業に多くの島民があつまった（直島）
- ・ 島民と観光客の間でコミュニケーションが多く生まれた（直島）
- ・ 都会の若い人と話ができて、お年寄りが元気をもらった（豊島）
- ・ 島がこれまでにない雰囲気（若さ、活気、刺激、日々の変化があった）に包まれていた（豊島）
- ・ 改めて豊島の良さを全国の人に知ってもらえた（豊島）
- ・ 島で飲食をする人も多く、島の経済にある程度貢献があった（豊島）
- ・ 島がこれほど賑わい活気づいたことはこれまでになく、元気をもらった（女木島）
- ・ アーティスト、こえび隊とつながりができた。これからもこのつながりを大切にしたい（男

文化の外部性からみた瀬戸内国際芸術祭



(図10) 住民の評価（次回も開催してほしいか）の推移

(出典：各回総括報告より筆者作成)

注：2010年には「わからない」にあたる選択肢がない。

木島)

- ・ 宿に迷惑がかからない程度に若い人を泊め、酒を飲みながら話しをするのが楽しかった (男木島)
- ・ 来場者に声をかけ、案内人になった島民が多くいた (男木島)
- ・ 自治会が当番制で交流館で「たこめし」を販売した。105日間続けるのは大変だったが、蛸を獲る人、作る人、売人の協力があったから成功した (男木島)
- ・ 小豆島に新しい風が吹いた。小豆島の観光客の層が変わった (小豆島)
- ・ 大島には子供がいない。子供と一緒に家族連れが大勢来てくれたことに感激した (大島)
- ・ 大勢の人にハンセン病の施設を知ってもらったことが良かった (大島)
- ・ 3年先の開催が楽しみである。また協力したい (犬島)
- ・ 若い人と話ができて若返った (犬島)
- ・ 多くの人に犬島を知ってもらったことが一番嬉しい (犬島)

課題や次回開催に対する意見もあった。

- ・会期中大変な混雑で、泊まる場所も、食べる場所がないという状況だった（直島）
- ・3年後では芸術祭の記憶が薄れてしまう。中間点で別のイベントをすると祭のインパクトが残るのではないか（直島）
- ・105日間、休みがなく疲れた。次回は、会期中に休みが必要である（豊島）
- ・田舎料理が食べたいという人が多かった。次回開催時の課題になる（豊島）
- ・3年後に芸術祭を開催することを前提に、それまでの2年間、豊島として何ができるか考えよう（豊島）
- ・作家やこえび隊とのつながりを今後もずっと持ち続けていく仕組みを考えなければならない（豊島）
- ・7月、8月は若い人が多くマナーが良かった。ゴミも持ち帰っていた。秋になると客層が変わって、マナーが悪くなった（女木島）
- ・島にお金が落ちる仕組みがない。島内に宿泊施設を作るなどを考えなければならない（女木島）

第1回目は、105日間連続で開催された。島民の間に「疲れた」という意見が多く、2回目以降は、春、夏、秋と会期を3回に分けて実施することになった。集中開催の島民負担を軽減すると同時に、来場者に、瀬戸内の春、夏、秋を楽しんでもらう狙いもあった。

直島には期間中29万人が訪れ、大混雑の様子であった。せっかく来てくれた来場者に、どのように満足してもらうか。マナーの悪い来場者への不満もあった。男木島は住民が協力し合って「たこめし」を販売し充実感があったが、女木島は宿泊や飲食の場が少なく、来訪者が増えても島にお金が落ちない。経済的な恩恵をどうもたらすかという点について、住民自身も問題意識を持っていることが窺える。

2022年第5回の芸術祭は新型コロナウイルス感染症の影響の下で開催された。離島では医療体制が不十分な中、不安も抱えながらの開催であった。住民意見交換会では下記のような意見があった⁹⁾。

- ・コロナ禍で来島者が少なかったが、芸術祭で多くの方に来てもらい徐々に活気が感じられた（直島）
- ・豊島の将来は交流人口抜きでは考えられない。多くの人に来てもらうために、歓迎の心が

文化の外部性からみた瀬戸内国際芸術祭

切だ（豊島）

- ・看板による鑑賞ルートの制限により、来場者が民家の密集部に入らなかったのはよかった（女木島）
- ・作品制作や運営で高齢者が関われなかったことが残念。次回は関わられる活動ができればよい（男木島）
- ・来場者との交流ができてよかったが、地元の商店に対する恩恵も考えれば、地域が発展すると思う（小豆島）
- ・小豆島はただでさえ広い中、作品が散らばると来場者の負担になる。周遊性を高める必要性がある（小豆島）
- ・コロナ禍で積極的に関わることができなかつたのが残念だ。次回は積極的に関わりたい（小豆島）
- ・初めて大島を訪れる人が多く、島のことを知ってもらえた（大島）
- ・今回は新型コロナウイルスの影響で食の提供を中止したが、次回は食の提供を通じて、島の食文化を体験していただき芸術祭を一緒に盛り上げていきたい（沙弥島）
- ・3年後も「送り太鼓」を実施したいが、子どもの人数は減っているので、次回は子ども主体ではなく住民1人ひとりの意識を上げていきたい（本島）
- ・住民の高齢化が進み、地元のお祭りや運動会など、これまでやってきた行事もできなくなっている中で、作家や来場者など若い人が来てくれるきっかけとなったことはよかったと思う。今後、若い人たちが島に住むきっかけとなるようなものを作り上げていければよい（高見島、多度津町本通）
- ・陸地部への来場者の周遊を促す方法を検討する必要がある。次回に向け、多度津の町を歩いてもらい、産業の活性化に繋げるにはどうすればよいのか考えなければならない（高見島、多度津町本通）
- ・観音寺総合高校のガイドツアーについて、地域の若い世代が伊吹を知るよい機会となったと思う（伊吹島）
- ・3年毎のお祭りではあるが、3年後まで活動を中断するのではなく、折に触れて、こえび隊と地域の皆さんが触れ合える機会が作れたらよいと思う（宇野港）

小さな島では「この先、集落につき立ち入り禁止」の看板が設置されるなど、新型コロナウイルス感染症の配慮や対策があり、大きな混乱もなく無事に終わったことへの安堵があった。コ

コロナ禍で積極的に関わることができなかったことを残念に思い、次回への期待の声も多い。事前説明会の開催や地域の子供たちの参加など地元をもっと巻き込むための方策、航路や周遊コースについての提案、地域活性化につなげるための工夫など、「自分ごと」として様々な意見や提案が出された。



(写真4) 新型コロナウイルス感染症への配慮もあってか、小さな島では「この先、集落につき立入禁止」の看板が立てられていた。

(筆者撮影)

芸術祭への住民の参画が重要

第1回芸術祭後の意見交換会で、小豆島の島民に「芸術祭に関わった人は大変な思いをしたが、全体として良かったと感じている。半面、関わっていない人も多く、そうした人は芸術祭にマイナスの印象を持った」という意見があった。芸術祭への参加、関与の度合いによって事業に対する評価が真逆に変わる、という指摘である。

地域型芸術祭が住民の考え方にどのような影響を及ぼすかを、定量調査をし、分析した先行研究がある。

勝村文子他(2008)は、新潟で開催されている大地の芸術祭の舞台である妻有地域で住民アンケート調査を実施し、その結果、①地域住民は来場者との交流よりもアーティストやボランティアと協働し、制作に携わった場面でより大きな影響を受ける、②高齢者も新たな人的ネットワークを獲得している、③協力した人は新しい知り合いをつくり、地域に好ましい変化を感じている。といった評価を得ている。住民が芸術祭に協力すると、他の地域行事への参加が増える。それが日々の生活でも参加や協力、地域への愛着の増加などの副次効果につながっている¹⁰⁾。

鷺見英司(2014)は、2006年と2012年の越後妻有大地の芸術祭の開催に合わせて住民アンケート調査を実施し、地域活性化の効果を「ソーシャルキャピタル」という概念を用いて検証した。芸術祭の運営に協力した住民ほど人々との交流が促進されたこと、高齢者の活躍を促進したこと、他地域の人や異なる考えを受け入れ、連携する土壌が構築されたこと、集落間および住民間の結束が強まったことなどを明らかにした¹¹⁾。

瀬戸内国際芸術祭についての調査研究では、室井(2013)、原(2021)の研究がある。

文化の外部性からみた瀬戸内国際芸術祭

室井（2013）は、2009年の芸術祭前に豊島と直島で、芸術祭後の2011年に男木島、女木島、豊島、直島で住民アンケート調査を実施している。事前調査では、①島民発意の内発的なイベントではなく、それでも島に協力を求められたために混乱も大きい、②生活課題の優先順位が医療や交通、教育や産業にあり、文化や交流を重視する芸術祭に対する関心もそれほど高くない、などが指摘された。一方、芸術祭に対する期待もあった。特に「多くの観光客が訪れて島に活気が生まれる」「島の魅力を島外に発信できる」などの期待値が高かった。

芸術祭開催後の調査では、①アートプロジェクトは地域の文化的自負を涵養し、対外的に社会的つながりを創出する地域づくりの効果を期待できる、②芸術祭の住民評価は、芸術祭で知り合った人がいるか、芸術祭に関与したかで左右され、次の開催意向にも影響する、③住民評価に影響を及ぼしたのは、来場者数ではなく、アーティストやボランティアとの継続的な関わりだった、④住民とボランティアの交流が芸術祭閉幕後も継続し、地域行事の支援に幅を広げ、持続的な支援関係が築かれたことは芸術祭の成果である、といった効果を導き出している¹²⁾。

原（2021）は、第1回芸術祭が行われた2010年12月と2011年1月に豊島の一集落で聞き取り形式のアンケート調査を実施した。さらに第4回芸術祭後には、豊島全戸を対象にアンケート調査を実施している。その結果、①多くの地域住民が芸術祭を肯定的に受け入れているが、否定的な人も23%～29%いる、②芸術祭に関わりがあった人々は、芸術祭が自身にもたらした変化、芸術祭の継続、満足度、いずれでも積極的な評価をしている、③芸術祭が始まって以降、移住者が増加したことが最も高い評価を得、次に島の知名度アップや活性化をめぐる評価が高かった¹³⁾。

いずれの調査でも、芸術祭への関与の度合いが、芸術祭の満足度、地域や自身にもたらす変化、継続意向に大きな影響を与えていることが指摘されている。地域型芸術祭では、地域住民の参画や協働を促し、地域内外の交流を活発にすることが肝要であると言える。

こえび隊という関係人口

第1回瀬戸内国際芸術祭に先駆けて、2009年にボランティアサポーター「こえび隊」が組織された。こえび隊は、瀬戸内国際芸術祭を支えるため、作品制作の手伝いや芸術祭のPR活動、芸術祭期間中の運営、各島での催しなどを手伝う。芸術祭の開催期間以外も、「ART SETOUCHI」と題したアート作品の公開や島で行われるイベント、地域行事などに参加する。2012年には、特定非営利活動法人瀬戸内こえびネットワークとして法人化された。その目的は、「瀬戸内国際芸術祭2010で発足したボランティアサポーター『こえび隊』の運営を担い、芸術祭、

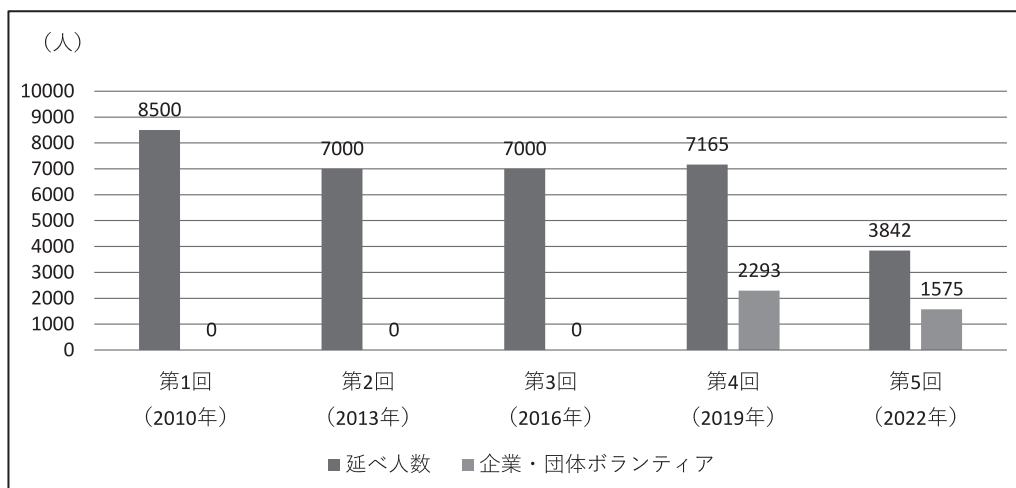
ART SETOUCHI全般を支える活動をする。島間、サポーターのネットワーク、行政と民間などの媒介者として機能する」ことである¹⁴⁾。

代表理事は北川フラム氏、事務局長を甘利彩子氏が務めている。常勤スタッフは8名（2023年6月現在）である。

当初、隊員をネットで募集するとともに、四国や岡山、関西で説明会を開いた。2010年11月1日時点のこえび隊の登録人数は、2,606人である。第1回芸術祭運営時に関わった人数（実働人数）は約700人、延べ約5,000人である、これに作品制作時を含めると、実働約800人、延べ約8,500人が参加した。47都道府県のうち、39都道府県から参加があった。

各回の芸術祭でこえび活動に携わった延べ参加者数の推移は図11の通りである。海外からこえび隊の活動に参加する人も回を重ねるごとに増えている。2016年第3回では、海外からの参加者がこえび隊の約1割になった。2019年第4回では、こえび隊の約18%が海外からの参加者で、中国、香港、台湾、タイ、マレーシア、シンガポールなどアジアの国／地域の他、カナダ、イタリア、スペイン、フランス、ドイツ等から参加があった。遠方からの参加者が宿泊しながら長期に渡り活動できるように高松市内に開設した「こえび寮」利用者の約54%が国外在住者であった。

2023年3月1日現在のこえび隊登録者数は、11,355名。そのうちお知らせだけを受け取る人及び最終活動日から3年以上経過した人は7,972名。3年以内に活動に参加した人は3,383名で



(図11) こえび隊の活動に携わった延べ参加者数の推移

(出典：各回総括報告より筆者作成)

注：第4回（2019年）からは、企業や学校を中心とした「企業・団体ボランティアサポーター」も作品受付等の活動を行っている。

文化の外部性からみた瀬戸内国際芸術祭

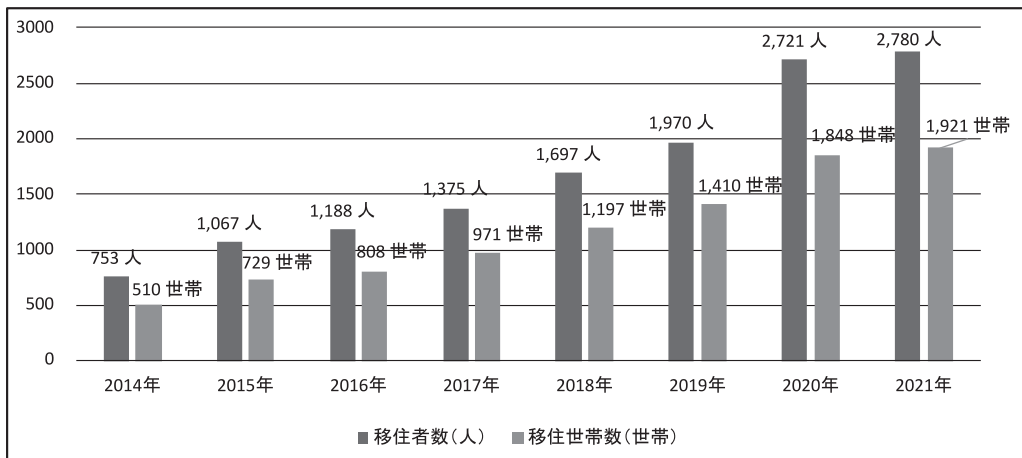
ある。その内訳は、四国が49.87%と最も多く、中国14.84%、関東12.03%、海外8.87%、関西8.75%と続く。年齢は小学生から90歳代まで幅広く、20代から40代で全体の6割余（62.49%）を占める¹⁵⁾。仕事を持っている人が時間をやり繰りをして参加するケースも多い。

瀬戸内国際芸術祭を訪ねると、受付、ガイド、作品説明などさまざまなところでこえび隊に出会う。リピーターも多い。最初は来場者として芸術祭に参加し、こえび隊の存在を知り、次は芸術祭とのかかわりを深めたいとこえび隊の活動に参加するようになったという声を聞いた。鑑賞する側から、芸術祭を支える側に回るとのことだ。こえび隊には年齢制限がなく、1日だけでも参加できる。活動内容も活動場所もいろいろである。都合や好みに合わせて活動を選択でき、最初の一步を踏み出しやすい。世界から集まるさまざまな年齢、職種のサポーターと交流できることも、こえび隊に参加する魅力である。

こえび隊は、芸術祭開催期間以外も、島に渡ってさまざまな活動をしている。芸術祭の継続作品の受付や作品メンテナンスのほか、島行事やイベントの手伝い、島のカフェやレストランの手伝い、こえび新聞の発行などを通して、島の人々とのつながりを保っている。彼らは、一時的に観光に来る「交流人口」ではなく、地域と継続的に多様に関わる「関係人口」である。

若者・子育て世代が移住する

瀬戸内国際芸術祭とその開催場所である島々に注目が集まり、多くの来場者が実際に瀬戸内に訪れる中、香川県や島への移住者が増加している。香川県への移住者の推移は図12の通りであ



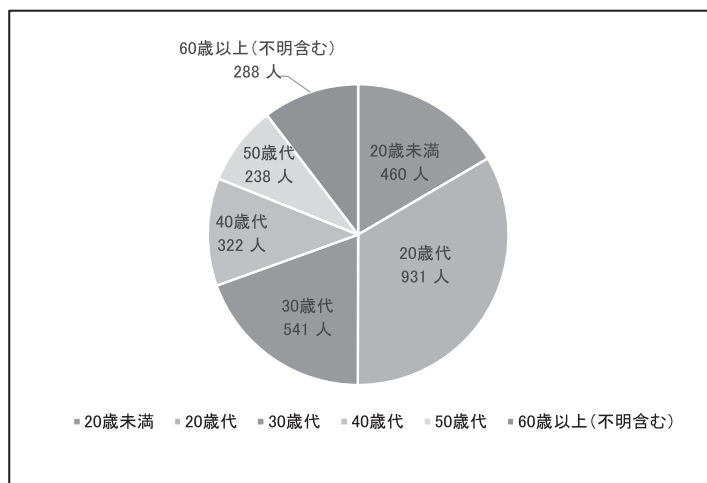
(図12) 香川県への移住者数・移住世帯数の推移

(出典：香川県地域活力推進課資料より筆者作成)

る。2021年の移住者を年代別にみると、20歳代が931人、次に30歳代(541人)が続く。この年齢層が全移住者の過半数を占めている。定年後の移住ではなく、若者・子育て世代の移住が多い(図13)。

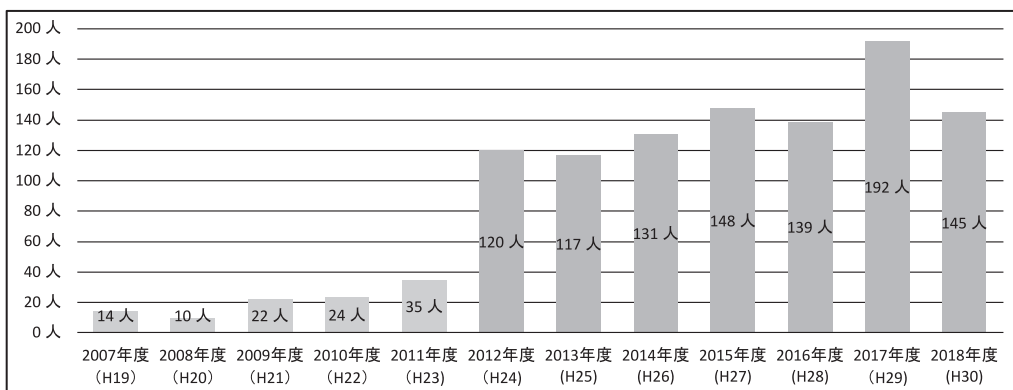
小豆島には、土庄町と小豆島町があるが、移住者数は、2021年には、土庄町151人、小豆島町177人の計328人であった(県推計)。

小豆島町は、2006年頃から移住促進に力を入れている。空き家バンクや移住者への就労支援、子育て支援を町が推進してきた。瀬戸内国際芸術祭が移住促進を後押しし、芸術祭開催以降、移住者は増加傾向にある(図14、図15)。



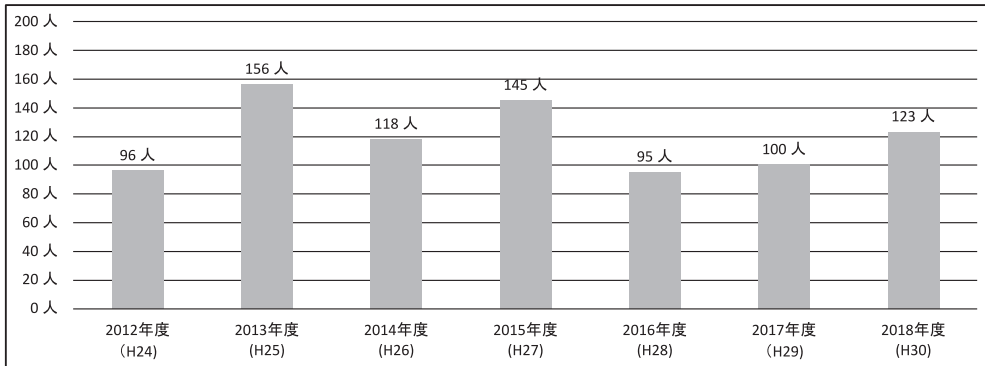
(図13) 香川県への移住者(2021年)の年齢別内訳

(出典：香川県地域活力推進課資料より筆者作成)



(図14) 小豆島町へのI/Jターン数の推移

(出典：小豆島町「第2期小豆島町の人口ビジョン」より筆者作成)



(図15) 小豆島町へのUターン数の推移

(出典：小豆島町「第2期小豆島町の人口ビジョン」より筆者作成)

小豆島町の移住者（Iターン/Jターン）に、進学・就職などの理由で島を出た後、生まれ育った出身地に戻って就職もしくは転職するUターン組を加えると、2018年度は268人に達した。これを年齢別に見ると、Iターン/Jターン組も、Uターン組も、20歳～39歳がもっとも多い（Iターン/Jターン組48%、Uターン組51%）。

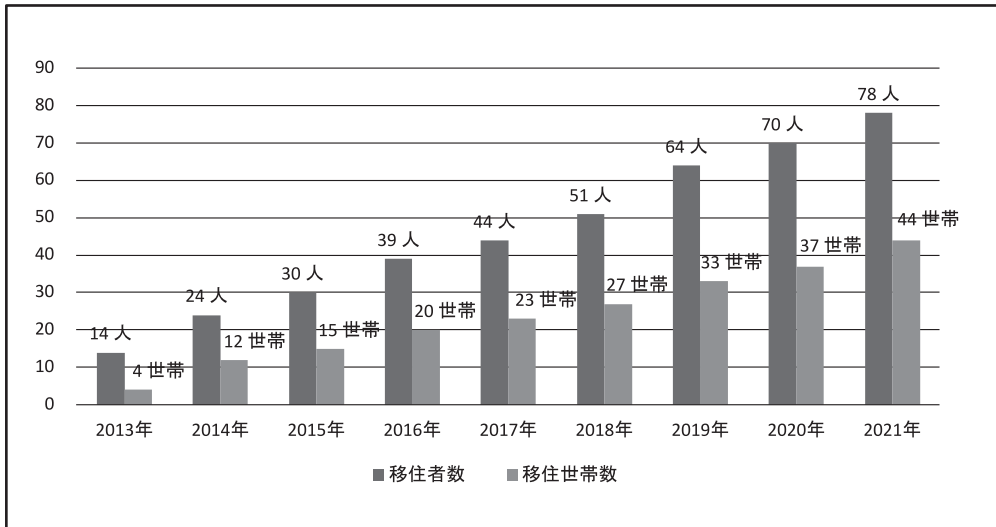
移住者には、地元の産業に携わる人もいるが、カフェや雑貨屋、書店を始めたり、地元特産のオリーブや醤油の販売、柑橘類を取り入れたビール醸造所を開くなど新しい仕事に取りかかる人もいる。東京のデザインカンパニーに籍を置き、農産品のブランディングや農家のためにWebサイトを立ち上げるなどのリモートワーカーもいる¹⁶⁾。

保育所、小学校、中学校が再開

男木島も、瀬戸内国際芸術祭を機に大きく変化を遂げている。高松港の北7.5km、女木島の北1kmに浮かぶ面積1.34km²、周囲5.9kmの小さな島である。住民基本台帳による人口は、2023年3月現在で148人。生業は漁業中心であったが、従業者の高齢化、後継者不足等の問題をかかえている。

男木島は、子どもがいなくなり、2002年に保育所が休所、2008年には小学校が休校し、2011年に生徒3人が卒業し中学校も休校した。

小学校、中学校の空き校舎は、2013年第2回芸術祭でアート作品の展示会場となった。その後、移住希望者が出てきたため、2014年4月、6年ぶりに小学生4人、中学生2人が通う男木小中学校が仮設校舎で再開された。2016年に男木小中学校の新校舎が完成し、5月には小規模保育事業所も開所して、1歳から5歳まで4人が入所した。2019年時点で、男木保育所に1歳から



(図16) 男木島への移住者数及び移住世帯数の累計 (2013年度からの累計〈年度末時点〉)
(出典：高松市資料より筆者作成)

4歳までの幼児7人が通い、小学生5人、中学生1人の計13人が男木小中学校で学んでいる。

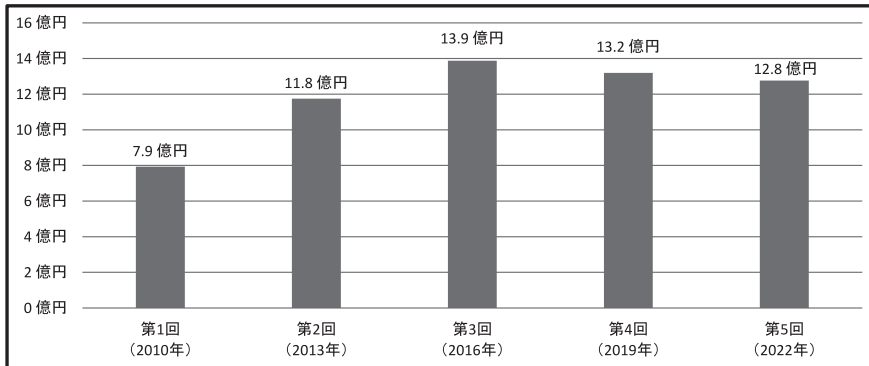
男木島の移住者の推移(累計)は図16の通りである。島民のおよそ半数が移住者である。故郷を元気にしたいとUターンしてきた出身者もいれば、海外からの移住者もいる。2018年7月15日、IT関係の仕事に携わっている人が実行委員長となって、無料のウェブサイト作成用ソフト「WordPress」の利用者らが親睦を深める「WordCamp」が、男木島で開かれた。これまで世界48カ国で開催され、日本では首都圏を中心に開かれてきたが、離島での開催は初めてであった。2020年9月には、男木島で2回目の「WordCamp」を、日本では初となるオンラインで開催した。

芸術祭を契機に男木島を知り、島に魅力を感じて移住してきた人々が、小さな島に大きな変化をもたらしている。

財源のバランス

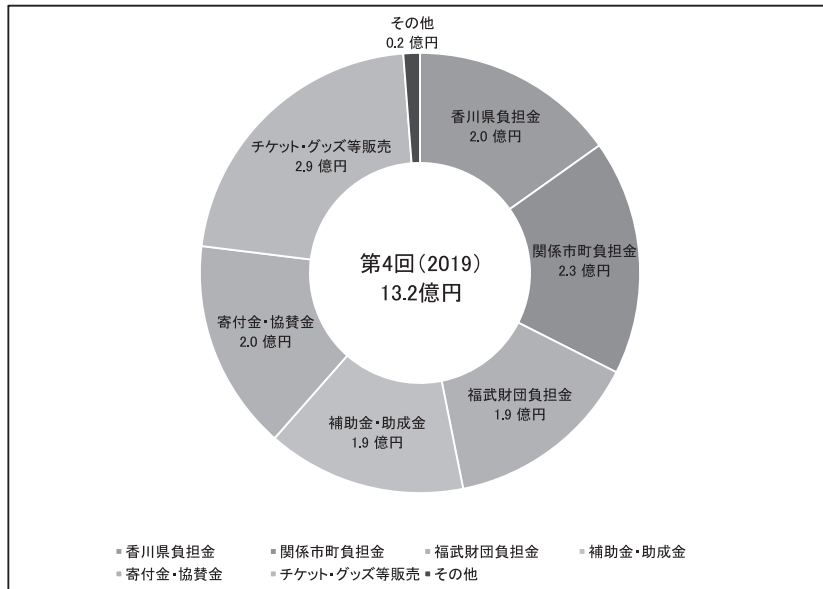
2010年第1回から2022年第6回までの予算の推移は図17の通りである。第2回芸術祭には、沙弥島、本島、高見島、栗島、伊吹島の5島と宇野港が新たに加わったため、第1回の当初予算7億9,000万円から第2回は11億8,000万円に大きく増加した。以降、第3回13億9,000万円、第4回13億2,000万円、第5回12億8,000万円。第2回目以降、行政の負担金はほぼ一定である。

文化の外部性からみた瀬戸内国際芸術祭



(図17) 芸術祭の予算 (収入・3ヵ年) の推移

(出典：各回総括報告より筆者作成)



(図18) 第4回 (2019年) 芸術祭の収入内訳 (3ヵ年)

(出典：2019総括報告より筆者作成)

増加分は、企業の協賛金、文化庁をはじめ各種助成金・補助金、チケット・グッズなど売上金の増による。

2019年第4回芸術祭の収入の内訳を見ても (図18)。芸術祭の予算は、開催年度を含む前後3年間で組まれる。芸術祭開催期間以外には、「ART SETOUCHI」と題したアートプロジェクト、作品のメンテナンス、広報活動、島での催しなどの予算もある。本祭時に比べて人数は

絞られるが、事務局も運営を続けている。

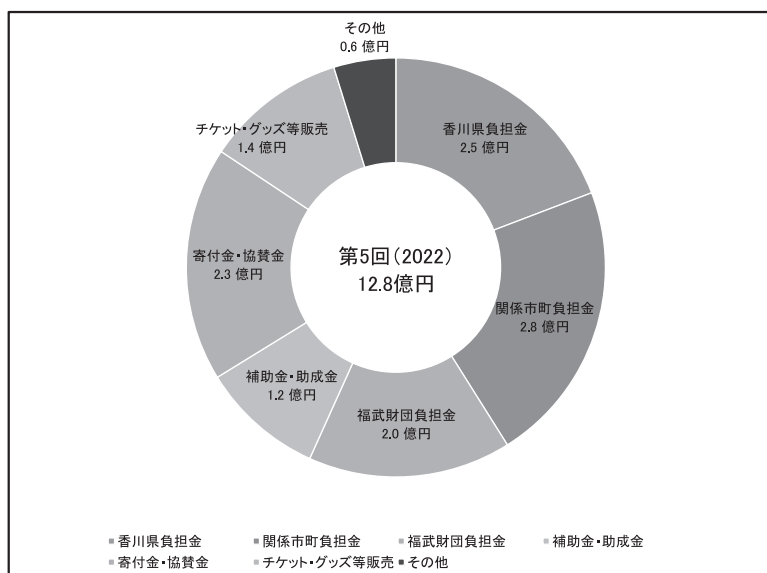
第4回芸術祭の収入は、実行委員会の負担金収入が6億1,800万円だった。香川県が2億円、高松市をはじめ関係市町が2億2,800万円（高松市1億円、高松市を除く市町が1億2,800万円）を拠出した。福武財団が1億9,000万円を負担した。

開催回によって助成や補助金を受ける先は異なる。2019年第4回は、文化庁、福武財団などの他、Australia Council for the Arts / オーストラリア・カウンシル・フォー・ジ・アーツ、Goethe-Institute/ゲーテ・インスティトゥート、Institut français/アンスティチュ・フランセ、台湾文化部など、各国政府などが設立した国際文化交流機関から、計1億9,300万円の助成を受けている。

企業や個人からの寄付金・協賛金が2億400万円にのぼる。一社1,000万円を寄付するパートナー企業（9社）から10万円～500万円までの協賛企業・団体（267団体）まで寄付の幅は広いが、地元企業から東京本社の企業まで業種、規模ともに様々である。

チケット・グッズの販売金は2億8,800万円。その他1,600万円。総計13億1,900万円になった。

収入の公民割合は、県と関係市町の負担金（4億2,800万円）が、全体の30.8%、福武財団負担金に企業等の寄付金・協賛金を加えた民間財源（3億9,400万円）が、29.9%、チケット・グッ



(図19) 第5回(2022年)芸術祭の収入内訳(3カ年)

(出典:2022総括報告より筆者作成)

ズの販売収入が21.8%である。補助金・助成金（1億9,300万円）の中には、国や政府機関の助成もあるが、あくまで競争的資金で、民間団体の助成メニューもあるのでまったくの公的財源とは言いにくい。公的財源、民間財源はほぼ同割合になる。

2022年第5回芸術祭の収入の内訳は図19の通りである。新型コロナウイルス感染症対策の経費が嵩み、香川県、関係市町の負担金がやや増加した。来場者が減少し、チケット・グッズの売り上げが前回より1億4,900万円減少した。補助金・助成金も減少したが、コロナ禍にも関わらず企業からの寄付金・協賛金は増加した。その結果、行政の負担金（5億2,400万円）は、全体の41%、福武財団負担金に企業等の寄付金・協賛金を加えた民間財源（4億3,100万円）が、33.8%、チケット・グッズの販売収入（1億3,900万円）10.9%、補助金・助成金（1億2,100万円）9.5%となった。やや公的負担割合が多いが、大枠では公的財源、民間財源がほぼ半々だった。

「金の切れ目が、事業の切れ目」にならないためには、財源のバランスをとること、多様な収入源を持つことが肝要である。持続的な運営のためには、広く、多様な資金を集める必要がある。瀬戸内国際芸術祭は財源のバランスが良く、それが持続可能な運営につながっている。もちろんチケットやグッズ販売などの自立的な収入の増加を目指す努力も欠かせない。

4. 文化の役割と外部性

文化芸術は個人の趣味や教養、精神的な満足、生きがいなどに関わるもので、行政が文化芸術の財・サービスを供給することの正当性については議論の的となってきた。一方、今日、文化の機能は、経済学や公共政策の領域のみならず、都市再生・地域再生の議論へと広がっている。芸術文化だけでなく、風景や食べ物、土地固有の職人仕事など、地域住民の暮らし方そのものを地域の文化資源として、まちづくりや観光資源として活用する事例も増加している。

文化芸術基本法の前文では、文化芸術の役割・意義について、文化芸術の本質面すなわち文化芸術が人間の本性に根ざしたものであるという側面と、効用面すなわち文化芸術の社会にとっての有用性という側面の両面から規定している¹⁷⁾。

文化事業の公共性のひとつは、地域に住む人々がその活動にかかわり、それをきっかけに人々が交流し、地域的なまとまりができ、地域のアイデンティティの確立につながることだろう。さらには、そこを訪れる広域の人々も巻き込んだ文化圏がつけられていくことで、経済活動の循環もできていく。

瀬戸内国際芸術祭は官民協働のプロジェクトであるが、実行委員会会長は香川県知事であり、関係各市町も主催に名を連ねる。行政の予算も計上され、県や市町から実行委員会事務局に人材が派遣される。地方自治体の公共政策の一つでもある。そこで、瀬戸内国際芸術祭が地域の経済及び社会に果たす役割、効果を、文化の外部性という視点から検証する。

文化の外部性についての諸理論

文化芸術に対して国家や自治体が公共政策として支援する理論的な根拠に関する基本的な議論と文化の外部性について概観しておく。

文化芸術への公的支援の根拠に関する分析としては、ボウモルとボウエン（1966）、フライとポメレーネ（1989）、ハイルブランとグレイ（1993）、スロスピー（1994、2002）らの研究がある。中でも、現代の文化芸術の公的支援に明確な理論的根拠を提示したのは、W.J.ボウモルとW.G.ボウエン著の『舞台芸術 芸術と経済のジレンマ』である¹⁸⁾。米国全土の演劇、音楽、バレエ、ダンス、オペラなど舞台芸術諸団体の財政問題を綿密なケーススタディに基づいて分析、舞台芸術は経済的に自立不可能であり、経済一般が発展していく中で、所得不足（赤字）が年々増大せざるを得ないことを科学的に立証した。

所得不足の必然性＝「市場の失敗」がただちに公的支援の根拠とはなり得ないが、芸術文化の持つ外部性に着目した。文化芸術はそれを直接享受する個人だけでなく、その個人が属するコミュニティに様々な便益をもたらし、私的財の側面と公共財の側面を合わせ持つ準公共財ないしは混合財であるとした¹⁹⁾。生産性が不変の舞台芸術は他の産業部門の生産性が上昇すると相対的に貧困化すること、文化や芸術はコミュニティを活性化させ住民の創造性を引き出すなど社会的便益が存在するので、混合財として公的支援の対象となり得ることなどを示した。また、舞台芸術の観客は、高所得・高学歴・専門職という属性を持つことを観客調査により明らかにし、芸術支援を行う際には、再分配の視点が必要であることを示唆した。

ボウモルとボウエンが指摘した外部性は、以下の4点である。

- ①舞台芸術が国家に付与する威信
- ②文化活動の広がりが周辺のビジネスに与えるメリット
- ③将来世代への効用（芸術水準の向上、観客の理解力の発達）
- ④コミュニティにもたらされる教育的貢献

フライとポメレーネは『芸術と市場—芸術経済学の探究』²⁰⁾において文化芸術の正の外部性

について次のように指摘している。

- ① オプション価値—今すぐ消費しないが、芸術の供給によって受けるかもしれない便益
- ② 存在価値—歴史的建造物のような、一度壊してしまえば商業ベースでは復元不可能なものが持つ便益。
- ③ 遺産価値—次世代の人々は、自分達の選好を現時点で表示することができないので、引き継ぐ努力を怠ると断絶してしまう便益。
- ④ 威光価値—国民としての誇りを感じさせ、文化的アイデンティティの維持に貢献する。
- ⑤ 教育的価値—社会の創造性や文化的評価能力を高め、その結果、社会の構成員が受ける便益。

同書の中でフライとポメレーネは、スイスにおける文化的案件への住民投票の結果について詳細な分析を行った。1967年、スイス・バーゼル市においてピカソの絵を購入すべきかどうかを住民投票で決定した際に、住民のどのような選考が反映されたかをバーゼル市を21区に分けて検証した。高所得者ほど賛成が多い、美術館への交通費が少ないほど賛成が多い、税金の上昇が大きいほど賛成が少ない、といった仮説では投票結果を説明できず、遺産価値、威光価値、存在価値という文化の外部性が評価されていることを証明した。投票に際して、コミュニティにとって名画を所有することの意義や、ピカソの絵の価値について議論や学習を行った後では、住民投票が私的な便益のみを考慮するわけではなく、社会的便益をも反映し得ることを示した²¹⁾。

またハイルブランとグレイは芸術文化の外部性について下記の6点を指摘している²²⁾。

- ① 将来世代への遺贈
- ② 国のアイデンティティまたは威信
- ③ 地域経済への貢献
- ④ 自由な教育への貢献
- ⑤ 芸術への参加による社会進歩
- ⑥ 芸術的イノベーションを促進することによる便益

文化芸術は人々の精神的な満足や生きがいなどに関わり、社会的な便益をもたらす一方、市場メカニズムに委ねているだけでは、必ずしも十分に供給されない可能性があり、経済学でいうところの準公共財と位置づけられる。同時に、文化芸術はそれを直接享受しない人にも便益

を及ぼす外部性がある。外部性には、①文化芸術を消費することによる経済波及効果と、②文化芸術を享受することで人やコミュニティにもたらされる非経済的便益の大きく2つの側面がある。

直接的な経済波及効果以外に人やコミュニティにもたらされる非経済的便益として、ボウモル/ボウエンのいう「舞台芸術が国家に付与する威信」、「将来の世代への利益」、「教育的貢献」、ハイルブラン/グレイが指摘する「自由な教育への貢献」、「芸術への参加による社会進歩」、「芸術的イノベーションを促進することによる便益」、フライ/ポメレーネのいう「遺産価値」、「存在価値」、「教育的価値」「オプション価値」などがあげられる。つまり、国家や地域の威信、教育的貢献、将来世代への遺贈、社会進歩といった外部性である。

文化芸術の外部性に関するこれらの諸説の相似的な対応を一覧にすると表3²³⁾のとおりである。

文化の外部性を指摘した理論の中でも、特にボウモル/ボウエンの「文化の外部性」理論は、文化芸術の外部性及びそれへの公的支出の根拠を、「有用性と芸術性の2つの側面から把握」²⁴⁾

(表3) 文化芸術の外部性

ボウモル/ボウエン	ハイルブラン/グレイ	フライ/ポメレーネ
・舞台芸術が国家に付与する威信	・国のアイデンティティまたは威信	・威光価値（国民としての誇り、文化的アイデンティティの維持）
・文化活動が周辺のビジネスにもたらすメリット	・地域経済への貢献	
・将来の世代への利益(芸術水準の向上、観客の理解力の発達)	・将来世代への遺贈	・遺産価値（次世代の人々は自分の選考を表示できないので、引き継ぐ努力を怠ると断絶してしまう便益） ・存在価値（歴史的建造物のように一度壊すと商業ベースでは復元不可能なものが持つ便益）
・コミュニティにもたらされる教育的貢献	・自由な教育への貢献	・教育的価値（社会の創造性や文化的評価能力を高めて、その結果、社会の構成員が受ける便益）
	・芸術への参加による社会進歩	・オプション価値（今すぐ消費しないが、芸術の供給によって受けるかもしれない価値）
	・芸術的イノベーションを促進することによる便益	

(ボウモル&ボウエン (1966)、中川幾郎 (2001)、後藤和子 (2005) 他 より筆者作成)

しており、文化経済学の共通認識となっている。また「芸術文化の領域だけでなく、サービス産業を中心に経済の様々な領域の分析において応用され」²⁵⁾、「福祉や医療・教育などの対人直接サービス領域の研究に大きな影響を与える」²⁶⁾ など、その論旨の一般的な妥当性が承認され、文化経済学ばかりでなく、多くの文献で引用されている。

については、ボウモル/ボウエンが提起した「文化の外部性」を基準に、瀬戸内国際芸術祭のこれまでの成果の検証を試みる。

5. 文化の外部性からみた瀬戸内国際芸術祭

5回を数える瀬戸内国際芸術祭の変化を、文化芸術の外部性理論に則って検証する。ボウモル/ボウエンが示した文化の外部性は、(1) 国家に付与する威信、(2) 文化活動の広がりや周辺のビジネスに与えるメリット、(3) 将来世代への効用、(4) 教育的貢献の4点である。

(1) 国家に付与する威信

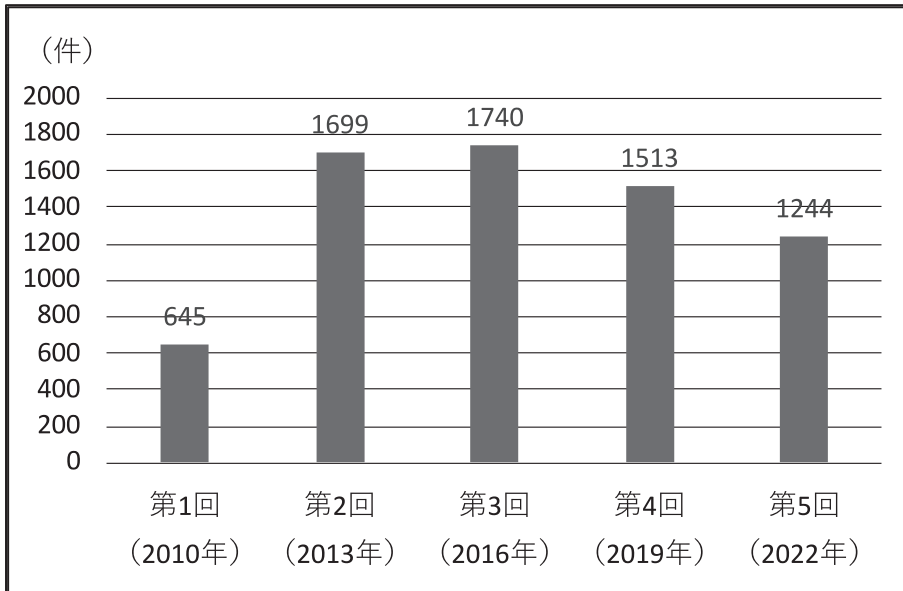
ボウモル/ボウエンが示した文化の外部性(1)「国家に付与する威信」を地域に読み替えると、地域イメージや地域ブランドの向上、あるいは地域住民の誇り、アイデンティティの確立になる。

瀬戸内国際芸術祭による地域の情報発信、それに伴い地域ブランドやイメージはどう変わったのであろうか。瀬戸内国際芸術祭に関するメディア掲載数の推移、瀬戸内国際芸術祭の公式WEBサイトへのセッション数の推移は図20、図21の通りである。

新聞、テレビ、雑誌等に掲載・放送された数は、第2回芸術祭時に飛躍的に伸び、第3回芸術祭をピークにやや減少傾向である。一方、公式WEBサイトへのセッション数については、新型コロナウイルス感染症の影響下にあった第5回を除くと、増加の一途である。海外からのアクセスも増えており、第3回芸術祭時は全アクセスの12.1%が海外から、2019年の第4回芸術祭では、20.6%が海外からのアクセスであった。

海外メディアでの報道も増えている。

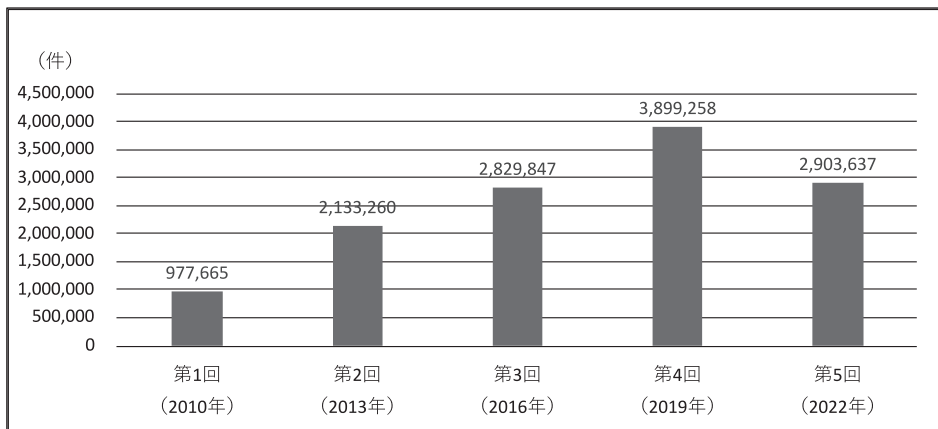
例えば、「ARCHITECTURAL DIGEST」(米)では、「2019年に訪ねるべき旅行先トップ20」を発表し、「瀬戸内」を世界第8位にランク付けした。その目玉は瀬戸内国際芸術祭である。海外からの旅行者は、東京、京都、大阪のゴールデンコースを旅するのが一般的だが、瀬戸内



(図20) メディア掲載数の推移

(出典：各回総括報告より筆者作成)

注：新聞・テレビ・雑誌等の各種メディアで、掲載・放送の主眼が芸術祭に置かれているものを抽出。各回芸術祭の前年秋から芸術祭期間終了まで約1年間の実績。



(図21) 公式WEBサイトへのセッション数の推移

(出典：各回総括報告より筆者作成)

注：Google Analyticsにより解析した「延べ何回Webサイトを訪問されたか」を示す数字

を見過ごし「過小評価している」と記す。「内海に点在する350の島風景に文化と食が完全に融合している」と指摘し、瀬戸内を訪ねるべき13の理由を挙げている²⁷⁾。

また、「Fodor's」(米)でも、「2019年に推奨する旅先ランキングのトップ52」を発表し、日本では唯一「瀬戸内」を選定し、世界第13位に評価した。「東京のような超近代的なカオス」都市に対して瀬戸内は「静かで内省的な土地柄です」と書いている。「『むかしむかし』の穏やかなロマンを誘う、独特の魅力に満ちたファンタジーランドです」という。穏やかで多彩な伝統を育む島々、そこを巡りながらシュールな現代アートを楽しむ瀬戸内国際芸術祭、その対照的な空間を訪ねる旅は独特で他ではなかなか経験することができない、という記事である²⁸⁾。

「The Guardian」(英)では、「外国人旅行者に見過ごされてきた」四国が、最近は見直されてきたと書かれていた。香川県三豊市の〈父母が浜〉に「今では多くの外国人観光客が浜の残照を撮りに来る」と書き、2019年開催の芸術祭では、「ぜひ、訪ねるべき会場になる」という記事である²⁹⁾。

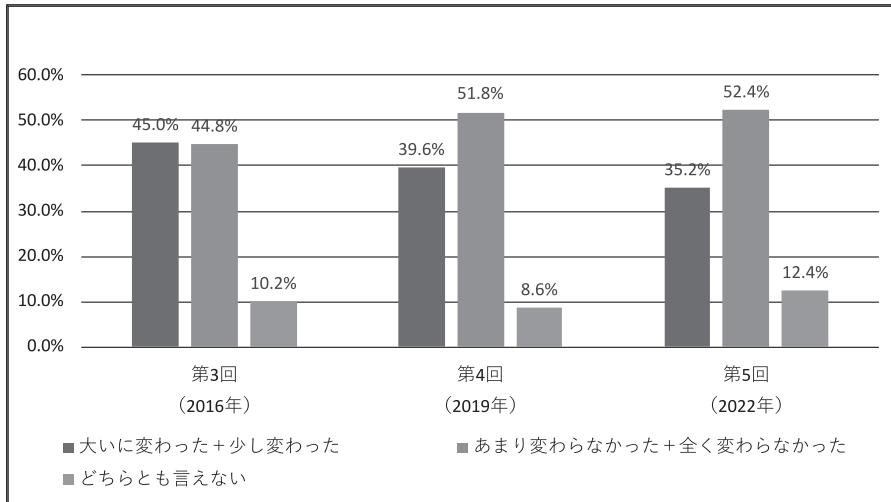
「The New York Times」(米)では、「2019年に旅行するならば」の旅行先52ランキングで、日本からは唯一「瀬戸内の島々」を第7位に選出した。広島平和記念資料館、しまなみサイクル道などと並べて瀬戸内国際芸術祭が開催されることが「瀬戸内の島々」の高ランク入りになった、という説明であった³⁰⁾。

他にも、イギリスの旅行雑誌「National Geographic Traveller」(UK版)(2019年1・2月号)では、「2019年に注目する旅行場所」の第一番に「瀬戸内」を選定した。アメリカの旅行誌「Condé Nast Traveler」(2018年12月)は、「2019年に訪れるのを推奨する19場所」で日本を選び、瀬戸内国際芸術祭について言及していた。

2022年第5回芸術祭についても、「Condé Nast Traveler」7月号が記事を掲載し、アメリカTIME誌のWorld's Greatest Places for 2022(「2022年世界の最も素晴らしい場所」)で「瀬戸内の島々」が選ばれ、瀬戸内国際芸術祭が紹介された。

このように、国内外多くのメディアに瀬戸内国際芸術祭が取り上げられており、芸術祭及び瀬戸内海地域の自然や文化の魅力、美しさ等を讃えている。広く、多くの人々に情報を届けることは、芸術祭への来場者増加に貢献するとともに、瀬戸内海地域の認知度向上やファン増加にもつながる。記者の目を介した客観性のある情報は、視聴者・読者から信頼や納得感を得ることにもなるだろう。芸術祭の来場者の増加、ボランティアサポーターの増加、ひいては移住者への増加につながっていく。

芸術祭によって、住民たちの地域への思いにも変化が見られる。実行委員会が実施する住民アンケートでは、芸術祭を通じて自分が住む地域を再発見した、地域への愛着や地域に対する



(図22) 住民の地域への見方の変化の有無（芸術祭を通じて地域の再発見や愛着、地域に対する思いや見方が変わったか）の推移

（出典 2016,2019,2022総括報告より筆者作成）

注：2010、2013は同データなし

思いや見方が変わったという声が40%前後ある（図22）。

芸術祭開催後の意見交換会でも、芸術祭によって住民の一体感が生まれた、改めて地域の良さを発見したという意見があった³¹⁾。

- ・瀬戸芸を通じて、地域が一体になることができ、島民同士の結束ができた（2013年 本島）
- ・芸術祭の開催によって島民の意識が変わったように思える（2013年 高見島）
- ・来場者から町の良さを逆に教えられた（2013年 宇野港）
- ・自分の住む町を素晴らしい所とってくれたり、感謝してくれたりしたことは、非常に嬉しかったし、また改めて地域の良さを発見する機会となった（2016年 小豆島）
- ・小さな集落で高齢化が進む中、芸術祭による外の刺激を受けることによって、地域の将来のために何かしなければならないというきっかけになった（2016年 小豆島）
- ・全国各地から高見島にきてもらえたと、「次回も来ます」といってもらえ、嬉しかった（2016年 高見島）

芸術祭の開催を機に、小豆島で「こまめ食堂」を開店した立花律子氏も、「芸術祭が始まって最も変化したのは、島の人たちの地域への思いだ」と言う³²⁾。若者が大勢来て、田畑で農作

業をする地元の人に、「いいところですね」「綺麗な景色ですね」という。「高齢でしんどいから米作りをやめたい」と話していたおじいさんが、草刈りの回数を増やしたり、畦道に花を植えている。来場者にいろいろ質問されるため、島についての勉強をし直している人もいる。地域も人も、褒められて、元気に、前向きになっていく。

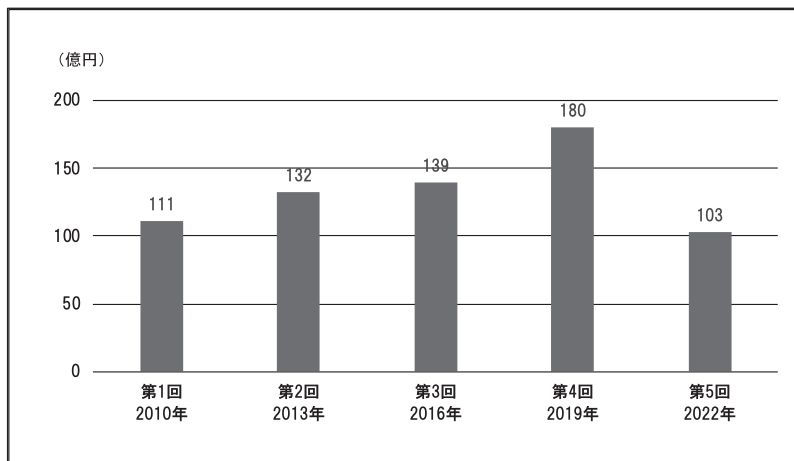


(写真5) こまめ食堂(小豆島) 2010年夏、第1回芸術祭に合わせて精米所だった建物を修復して食堂をスタートした。(筆者撮影)

(2) 芸術祭の経済効果

ポウモル/ポウエンによる文化の外部性

(2) は、文化活動の広がりが周辺のビジネスに与えるメリットである。実行委員会は、金融機関と共同で、産業連関表を用いた経済波及効果を算出している。第1回から第5回までの経済波及効果の推移は図23の通りである。経済波及効果は、コロナ禍の第5回を除けば回を追うごとに拡大し、2019年第4回は、180億円に達している。地域活性化のための芸術祭は、目の前の数字的な効果だけを追うものではないが、公共政策として次回開催の合意を得るためには、



(図23) 経済波及効果の推移

(出典：各回総括報告等より筆者作成)

注：経済波及効果の計算は2010は日本銀行高松支店、2013は日本政策投資銀行と瀬戸内国際芸術祭実行委員会、2016、2019、2022は日本銀行高松支店と瀬戸内国際芸術祭実行委員会の共同試算。

短期的な成果を問われることも事実である。

2022年第5回は、コロナウイルス感染症の影響で、来場者数が過去最少となり、経済波及効果も減少した。それでも観光庁（四国運輸局）によると、2022年1月から10月までの香川県内の延べ宿泊者数は前年比154.9%で、8月の都道府県別の客室稼働率において、香川県が59.5%と全国5位の稼働率であった。また、香川県が公表している県内の主要観光地（栗林公園、屋島、琴平、小豆島）の2022年ゴールデンウィーク期間中（4月29日からの10日間）の入込客数は19万5千人で前年比187.4%となった。高松空港の2022年4月から10月までの利用実績は、前年比253.2%、芸術祭の会期の中心となる5月、8月の2か月では前年比301.1%であった³³⁾。

前述のとおり、瀬戸内国際芸術祭に関するメディア報道数は相当な数に上る。第1回、第2回芸術祭後に、実行委員会は無料で掲載された芸術祭関連記事や放送を広告料金やCM料金に換算する、いわゆる「広告費換算」を行っている。第1回芸術祭時のパブリシティ効果は8億円以上³⁴⁾、第2回芸術祭時は約33億円³⁵⁾と算出されている。

(3) 将来世代への貢献

ボウモル/ボウエンによる文化の外部性 (3) 将来世代への効用とは、「芸術鑑賞能力は訓練や出会いに適した時期をはずしたら獲得できるものではないと理解されて」おり、将来に備えるためには、現在芸術への支援が必要だと説く。

高松市では、第1回の芸術祭開催に先駆けて、2009年から保育所や幼稚園、こども園にアーティストである「芸術士」を派遣する「芸術士派遣事業」を企画した。様々な芸術分野に豊富な知識を持つ「芸術士」が、保育所・こども園・幼稚園で子どもたちと生活を共にする。子どもたちの興味や芸術表現をサポートし、子どもたちの自由な発想と創造力を最大限に引き出す環境をつくる。子どもにも、保護者にも好評で、市内8割ほどの施設から、芸術士の派遣要請がある。現在では、丸亀市や善通寺市をはじめ近隣の市町にも、同じ事業が広がりつつある。

令和4年度は、高松市内97施設の保育所・こども園・幼稚園で活動が行われた。単発のワークショップを実施するのではなく、専門性がある芸術士が継続的に保育所などに行く。年間を通して保育に参加し、子どもたちの感性や創造力の芽を育む活動である。芸術士は日々の保育の中で保育士・幼稚園教諭と連携しながら子どもたちが自由に表現する手助けをする。芸術士の専門領域は、絵画、彫刻、造形、身体表現、音楽など幅広い。高松市を拠点に活動しているアーティストや他地域から移住してきたアーティストもいる。芸術祭を契機に新しい活動が始まり、アーティストやその卵達が、高松に集まっている³⁶⁾。

また、高松市は、大島アーティスト・イン・レジデンス事業として、大島の歴史を次代に伝える「こどもサマーキャンプ」の活動を行っている。2014年に始まったこのイベントでは、毎年、小学生から中学生の子どもたちが大島を訪れ、大島青松園の入所者から話を聞く。ハンセン病の歴史を学び、講師のアーティストとアート活動や自然を楽しむワークショップである。

芸術士派遣事業を請け負っているのは、高松市に本拠を置くNPO法人アーキペラゴである。アーキペラゴは、2010年第1回芸術祭当初から男木島の「漆の家」の運営に携わり、第5回では高松港の食のテラスを運営するなど芸術祭に参画している。大島アーティスト・イン・レジデンス事業は、NPO法人瀬戸内こえびネットワークが事業実施に携わっている。

芸術祭の開催がこうした官民連携活動を生み出し、市民や子どもたちが参加する、平素からの活動が芸術祭への関心や参画を促すという循環につながる。経済効果や来場者数などの数字には表れないが、瀬戸内国際芸術祭の地域創生への貢献である。瀬戸内国際芸術祭がコミュニティや地域の本質的な再生・維持につながっているかをめぐっては議論があるところだが³⁷⁾、高松市の芸術士派遣事業、大島の活動は、地域住民や地元アーティストに文化資源を再分配し、地元の人々を巻き込む文化教育的なプロジェクトになっている。そして新たな社会関係を構築している。

(4) 教育的貢献

文化芸術には人々の生活の質を高め、共同体に対して活力を提供する教育的貢献がある。

芸術祭では、アーティストは、地域に入り、地域の人々の話を聞き、地域の文化を体感する中で作品を制作する。住民やサポーターと一緒に作品の協働制作を行うアーティストも多い。

台湾の作家・王文志氏は、2010年の第1回瀬戸内国際芸術祭から小豆島に出品を続けており、毎回竹を使った作品を発表している。材料となる竹は地元住民らが4000本～5000本を切り出して用意し、王氏は住民らの協力を得ながら作品を仕上げる。

アーティストによるワークショップ等も各島で行われている。アーティストやこえ



(写真6) 王文志「ゼロ」(小豆島) 地域住民と協働で切り出した約4000本の竹を素材にした巨大な作品。中山地区の千枚田が広がる田園風景と調和している。(筆者撮影)

び隊と一緒に、作品制作等を協働することについて住民は下記のように評価している³⁸⁾。

- ・アーティスト、こえび隊とのつながりができ、これからもこのつながりを大切にしていきたい (2010年 男木島)
- ・作品の制作を通じて与島地域 (沙弥島・瀬居島・与島・櫃石島・岩黒島) が一つになれた (2013年 沙弥島)
- ・作家は島民に熱心に作品を説明してくれたし、ワークショップで指導してくれた。雨が降る中でも、材料を集めに島を回っていた。作家の熱意が伝わったので、多くの島民が協力したと思う (2016年 女木島)
- ・作家の人と人をつなぐ力はすごいと思う。地元では、その人なしでは瀬戸芸は始まらないというくらい根づいている (2016年 沙弥島)
- ・作品やイベントで活用された地域にある資源や歴史、文化、民俗等を今後も作家と共有していきたい (2016年 本島)
- ・作家は本当に一生懸命やってくれて、感心した。島民が一緒になって制作に携わり、島全体で盛り上げた芸術祭だった (2016年 粟島)

芸術祭を機に、地元のお祭りが復活し、それが子供達にも良い影響を及ぼしているという意見もあった。

- ・地元中学生により、粟島の獅子舞を復活させた。このことで教育効果もあり、あまり喋らなかった子が喋るようになった。これからも持続させ、運動会等で披露する場を作りたい (2019年 粟島)

アート活動以外にも、住民の自主的な活動が各所で起こっている。例えば、2022年第5回芸術祭時には、直島、豊島、沙弥島、本島、粟島、伊吹島等で、住民による清掃活動が行われた。直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、本島、高見島、粟島、伊吹島の港などでは、住民による来場者の出迎え、見送りが行われた。

女木島では芸術祭の開催に合わせ、2軒の飲食店が新たに開業し、男木島では観光協会が中心になり港で土産物の販売を行った。豊島では、住民と福武財団が協働し、棚田で田植え体験、収穫体験等の農業体験を行った。大島では、大島で採れた梅や柑橘類を使ったお菓子が販売さ

れた。犬島では婦人会により季節の食がふるまわれ、高見島では、島出身者や住民の親族が期間限定で飲食店を開店し、郷土料理や地元でとれた食材を用いた料理を来場者へ提供した。伊吹島では、お茶会の開催や地元の女性らによる弁当の販売が行われた。

小豆島の「迷路のまち」ボランティアガイド、沙弥島では「坂出親子おてつ隊」による島内ガイド、高見島の「さざえ隊」の島歩きガイド、粟島での「子どもガイド」、宇野港周辺でも、スチューデントガイド、ボランティアガイドなど、地元住民や学生、子どもたちによる来場者の案内、ガイド等が行われた。

他にも、住民が自作のベンチを設置したり、高校生主体のステージイベントやマルシェが開催されるなど、さまざまな地域活動が喚起され、将来の瀬戸内を担う子どもたちを育成する活動も活発である³⁹⁾。



(写真7) 多くの島で、住民による来場者の見送りが行われた。(筆者撮影)

おわりに

文化経済学の共通認識となっているボウモル/ボウエンが提示した文化の外部性4項目—①威信、②ビジネスメリット、③将来世代への効用、④コミュニティへの教育的貢献—に基づいて、瀬戸内国際芸術祭が地域にもたらしている効果の検証を試みた。瀬戸内国際芸術祭が地域にもたらした影響を、ボウモル/ボウエンの文化の外部性に照合すると表4の通りである。

この4項目から瀬戸内国際芸術祭の地域への貢献を鑑みると、顕著な効果が見て取れる。経済的効果や情報発信による地域ブランドの向上はもちろん、地域の特徴や人々の生活に根ざした地域固有の文化資源を、アートを媒介に際立たせることは、住民が自分たちの住む地域を見直し、一体感を生み出し、地域への誇りにつながっている。芸術祭での協働が、他の地域活動にも活力を生み出し、地域再生に貢献すると考えられる。

瀬戸内の離島の現状—高齢化、過疎化は依然として厳しい。住民の意見にもあったが、3年

(表4) 文化芸術の外部性と瀬戸内国際芸術祭による地域への影響

ボウモル/ボウエンによる 文化の外部性	瀬戸内国際芸術祭によって喚起された活動等
・舞台芸術が地域にもたらす威信	<ul style="list-style-type: none"> ・来場者数※ ・各種メディア掲載、海外メディアでの報道、公式ウェブアクセス数※、SNS発信数等 ・旅行先ランキング等の選出 ・住民の地域への誇り、自信の回復
・文化活動が周辺のビジネスにもたらすメリット	<ul style="list-style-type: none"> ・経済波及効果※ ・地場産業の活性化 ・新規事業（宿泊、飲食、ツアー、IT関連事業等）
・将来の世代への利益	<ul style="list-style-type: none"> ・次世代の創造活動（ワークショップ、こどもサマーキャンプ、保育所・幼稚園・こども園への芸術士派遣事業等） ・教育委員会や高等学校との学校連携事業 ・移住者の増加
・教育的貢献	<ul style="list-style-type: none"> ・住民の自主的活動（清掃活動、来場者の出迎え・見送り活動、特産品・郷土料理の提供、お接待等） ・芸術祭以外の地域活動の活性化（伝統的祭り、清掃活動等） ・島間交流事業による住民同士のネットワーク構築 ・内外のボランティアサポーター、地域の企業・団体サポーター ・地域とアジア各国との繋がりを深めるプロジェクト

(出典：筆者作成)

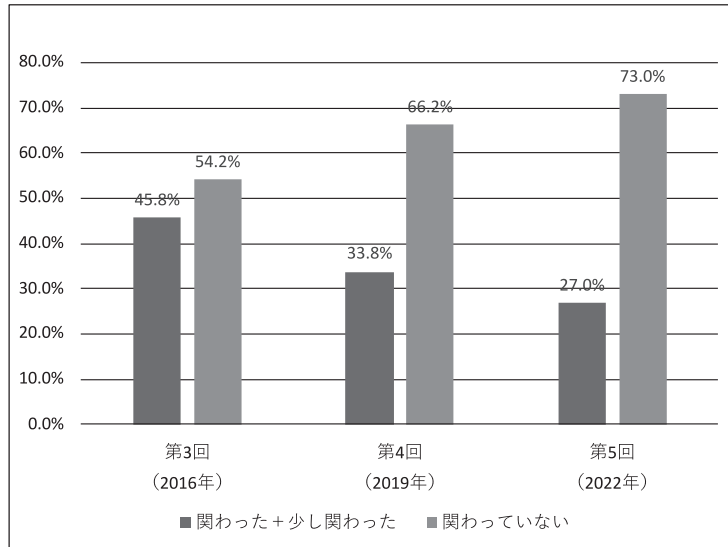
※新型コロナウイルス感染症の影響下にあった2022年を除けば増加傾向にある

に1度100日間の芸術祭開催中の賑わいのみならず、開催期間以外に活動をどう継続するか。移住者の定住化、芸術祭の持続可能性、島の生業の持続性や新しい仕事をどう生み出すか等、継続した努力が欠かせない。

作品受付やボランティアなどに「関わった」「少しは関わった」と答える住民の数が減少していることも気付きである。特に第5回目の芸術祭では、新型コロナウイルス感染症の影響で、「芸術祭に関わっていない」と答えた住民が73%に達している（図24）。次回芸術祭への期待の声も多くあったが、実際にどのくらい住民たちの関わりや交流が復活するか。再度住民の参画を促す工夫が求められるだろう。

芸術祭と関わりのあった人は、芸術祭への評価が高いというだけではなく、他の地域活動にも積極的に参加し、コミュニティの活性化につながる。そのためにも、芸術祭が、住民の自分ごとになることが肝要である。芸術祭が地域の自発的な動きや連鎖を生み出すためには、活動

文化の外部性からみた瀬戸内国際芸術祭



(図24) 住民の芸術祭への関わり（作品制作・受付、来場者の見送り、案内、食事など芸術祭に関わったか）の推移

(出典 2016,2019,2022総括報告より筆者作成)

注：2010、2013は同データなし

を推進していく中で住民の対話と交流を積み重ね、人々の関心や熱意を紡いでいくことが鍵になる。

瀬戸内国際芸術祭を訪れる来場者（交流人口）、芸術祭を支えるサポーター（関係人口）、そして芸術祭を機に増えてきた移住者（定住人口）など、5回の開催を重ねて広がってきた人の動きも貴重な成果である。地域型芸術祭が内外の人々や地域社会にもたらしてきたものを、どのように活かして地域社会の変革、地域の持続可能性につなげていくか。これからも注視していきたい。

本稿は、令和3-4年度に採択された、大阪商業大学アミューズメント産業研究所 研究プロジェクトの成果の一部である。ご支援に感謝申し上げたい。

〔注〕

- 1) 大阪商業大学商業史博物館紀要第12号 2011年10月30日 51-84ページ
- 2) 初出 狭間恵三子『瀬戸内国際芸術祭と地域創生-現代アートと交流がひらく未来』学芸出版社 2023年 14-15ページ
- 3) 2021年7月15日 高松市内にて 元香川県知事・真鍋武紀氏への筆者インタビューより
- 4) 2021年7月15日 高松市内にて 元香川県知事・真鍋武紀氏への筆者インタビューより
- 5) 特定の場所で、その特性を活かして制作する表現。「サイト・スペシフィック・アート」という表現として

- は、立体物を設置したものが多く、身体表現で場所と関わる、自然物の物理的均衡を用いて作品を構築するなど様々な方法が存在する。「サイト」という観点では、森林、砂漠などの自然環境、都市、村落、田園などの社会環境、さらには水中などの特殊な環境など多様な選択肢があり、また恒久性、一時性という表現上の設計の違いを見ることが出来る。(『美術手帖』 沖啓介)
- 6) 山本暁美、川原晋、原直行「地域振興における芸術・文化活動の役割と影響 - 2013瀬戸内国際芸術祭訪問者意識調査報告」『観光科学研究』7 2014年 59-64ページ
 - 7) 山本暁美「瀬戸内国際芸術祭における訪問者の意識動向」『地域活性化学会2020年研究大会論文集』12巻 2020年 214-217ページ
 - 8) 瀬戸内国際芸術祭実行委員会「2010総括報告」2010年12月20日
 - 9) 瀬戸内国際芸術祭実行委員会「2022総括報告」2023年2月9日
 - 10) 勝村文子他「住民によるアートプロジェクトの評価とその社会的要因-大地の芸術祭 妻有トリエンナーレを事例として-」『文化経済学』6 (1) 2008年 65-77ページ
 - 11) 鷺見英司「大地の芸術祭とソーシャルキャピタル」『アートは地域を変えたか 越後妻有大地の芸術祭の十三年 2000-2012』慶應義塾大学出版会 2014年 63-99ページ
 - 12) 室井研二「離島の振興とアートプロジェクト-『瀬戸内国際芸術祭』の構想と帰結-」『地域社会学会年報』25巻 2013年 93-107ページ
 - 13) 原直行「住民による瀬戸内国際芸術祭の評価-豊島を事例として-」『香川大学経済論叢』93巻4号 2021年 301-343ページ
 - 14) 特定非営利活動法人瀬戸内こえびネットワーク 定款
 - 15) 特定非営利活動法人瀬戸内こえびネットワーク 2022年度 事業報告
 - 16) 香川県 政策部地域活力推進課 香川移住ポータルサイト「かがわ暮らし」<https://www.kagawalife.jp>
NPO法人トティエ「島暮らしナビ」<https://shimagurashi.jp/>
 - 17) 平成十三年法律第百四十八号 文化芸術基本法 前文「文化芸術を創造し、享受し、文化的な環境の中で生きる喜びを見出すことは、人々の変わらない願いである。また、文化芸術は、人々の創造性をはぐくみ、その表現力を高めるとともに、人々の心のつながりや相互に理解し尊重し合う土壌を提供し、多様性を受け入れることができる心豊かな社会を形成するものであり、世界の平和に寄与するものである。(後略)」
 - 18) Bowmol W.J.&Bowen W.G *PerformingArts The Economic Dilenma*, MIT Press, 1966年 (池上惇・渡辺守章監訳『舞台芸術—芸術と経済のジレンマ』芸団協出版部 1992年)
 - 19) W.J.ボウモル、W.G.ボウエン 池上惇・渡辺守章監訳『舞台芸術—芸術と経済のジレンマ』芸団協出版部 1992年 494-500ページ
 - 20) Frey,b.s.andPommerehne,W.W. *Muses and Marke: Exploration in the Economic of The Arts*, Basil Blackwell Ltd. 1989年 (訳は 後藤和子『文化と都市の公共政策』有斐閣 2005年による)
 - 21) 後藤和子『文化と都市の公共政策』有斐閣 2005年 75-76ページ
 - 22) James Heilbrun, Charles M.Gray, *The Economics of Artsand Culture*, An American rspective, Cambridge U.P. 1993年 (訳は 後藤和子『文化と都市の公共政策』有斐閣 2005年による)
 - 23) 初出 狭間恵三子「ミュージアムの公共性についての一考察—公共性議論と文化の外部性から」大阪商業大学商業史博物館紀要第12号 2011年10月30日 62-66ページ
 - 24) 池上惇他編『文化政策学の展開』見洋書房 2003年 49ページ
 - 25) 阪本崇「文化経済学と新しい公共性—政策論的視点から見た『ポーモルの病』の貢献」同志社政策研究2号 2008年 95ページ
 - 26) 後藤和子『文化と都市の公共政策』有斐閣 2005年 50ページ、
 - 27) 「ARCHITECTURAL DIGEST」(July 25, 2018)
<https://www.architecturaldigest.com/story/setouchi-japan-design-travel-guide>
 - 28) 「Fodor's」(November 12, 2018)
<https://www.fodors.com/news/photos/fodors-go-list-2019>
 - 29) 「The Guardian」(November 16, 2018)
<https://www.theguardian.com/travel/2018/nov/16/the-japanese-beach-that-became-an-instagram-sensation>
 - 30) 「The New York Times」(January 9, 2019)

文化の外部性からみた瀬戸内国際芸術祭

<https://www.nytimes.com/interactive/2019/travel/places-to-visit.html>

- 31) 瀬戸内国際芸術祭実行委員会 各回総括報告
- 32) 2022年7月31日 小豆島にて 立花律子氏への筆者インタビューより
- 33) 瀬戸内国際芸術祭実行委員会「2022総括報告」2023年2月9日
高松空港株式会社が毎月発表している「高松空港旅客輸送実績」より実行委員会事務局で集計。
- 34) 瀬戸内国際芸術祭実行委員会「2010総括報告」2010年12月20日
博報堂による推計。会報誌等、新聞（地方紙、地方版）、ニュース（テレビ、ラジオ、新聞等）、ウェブ関係、海外メディアは含まない。
- 35) 瀬戸内国際芸術祭実行委員会「2013総括報告」2013年12月20日
株式会社中国四国博報堂による推計。会報誌等、ニュース（テレビ、ラジオ等）、ウェブ関係、海外メディアは含まない。
- 36) 2022年7月14日 高松市内にて 高松市長・大西秀人氏への筆者インタビューより
- 37) 金谷信子「瀬戸内国際芸術祭における公民パートナーシップ ― その利点と課題」『広島国際研究』20巻 2014年 75-91ページ
清水真帆「芸術祭を通じた持続可能な地域の在り方に関する一考察 ― 香川・瀬戸内国際芸術祭と香港・火炭の事例比較研究」『大正大学紀要』102号 2017年 319-336ページ
- 38) 瀬戸内国際芸術祭実行委員会 各回総括報告
- 39) 瀬戸内国際芸術祭実行委員会「2022総括報告」2023年2月9日

〔参考文献〕

- 池上惇他『文化経済学』有斐閣 1998年
池上惇他編『文化経済学入門』丸善ライブラリー 2001年
梅棹忠夫監修『文化経済学事始め 文化施設の経済効果と自治体の施設づくり』総合研究開発機構編 学陽書房 1983年
梅棹忠夫「文化行政のめざすもの」『梅棹忠夫著作集 第21巻 都市と文化開発』中央公論社 1993年
香川大学瀬戸内圏研究センター『瀬戸内海観光と国際芸術祭』美巧社 2012年
北川フラム/瀬戸内国際芸術祭実行委員会『瀬戸内国際芸術祭2010』美術出版社 2011年
北川フラム/瀬戸内国際芸術祭実行委員会『瀬戸内国際芸術祭2013』美術出版社 2014年
北川フラム/瀬戸内国際芸術祭実行委員会『瀬戸内国際芸術祭2016』現代企画室 2017年
北川フラム/瀬戸内国際芸術祭実行委員会『瀬戸内国際芸術祭2019』青幻舎 2020年
北川フラム/瀬戸内国際芸術祭実行委員会『瀬戸内国際芸術祭2022』現代企画室 2023年
金泰昌『公共哲学 15 文化と芸能から考える公共性』東京大学出版会 2004年
熊倉純監修『アートプロジェクト―芸術と共創する社会』水曜社 2014年
暮沢 剛巳/難波 祐子編著『美術を巡るコミュニティの可能性 ビエンナーレの現在』青弓社 2008年
小林真理他編『都市政策の課題と芸術文化の役割』プロジェクト研究「日本の文化政策とミュージアムの未来」日本学術振興会 2009年
谷口文保『アートプロジェクトの可能性-芸術創造と公共政策の共創』九州大学出版会 2019年
椿昇・原田祐馬・多田智美編著『小豆島にみる日本の未来のつくり方』誠文堂新光社 2014年
中川幾郎「芸術文化の公的振興に関する理論的根拠について-英国芸術評議会の現状を通じて-」帝塚山大学法政策学部紀要『帝塚山法学』第2号 1999年
中川眞『アートの力』和泉書院 2013年
中島正博「過疎高齢化する離島のまちづくりと芸術祭-瀬戸内・男木島の再生へ向けた住民の活動」『広島国際研究』20 2014年
野田邦弘「現代アートと地域再生―サイト・スペシフィックな芸術活動による地域の変容」『文化経済学』30 2011年
八田典子「芸術受容の『場』の変容-『大地の芸術祭』に見る『展覧会の新しいかたち -』」島根県立大学総合政

- 策学会『総合政策論叢』第8号 2007年
- パブロ・エルゲラ『ソーシャリー・エンゲイジド・アート入門 アートが社会と深くかかわるための10のポイント』
フィルムアート社 2015年
- 福武総一郎+北川フラム『直島から瀬戸内国際芸術祭へ—美術が地域を変えた』現代企画室 2016年
- 藤田直哉「前衛のゾンビたち—地域アートの諸問題」『すばる』集英社 2014年10月号
- 藤田直哉編著『地域アート/美学/制度/日本』堀之内出版 2016年
- 松村文子、市田信行、吉川郷主、水野啓、小林慎太郎「アートプロジェクトを用いた地域づくり活動を通じたソーシャルキャピタルの形成」『環境情報科学論文集』19 2005年
- 三宅美緒「アートプロジェクトにおけるボランティア活動の持続要因の考察：瀬戸内国際芸術祭で活動するボランティアの視点から」文化経済学 第14巻第2号 2017年
- 吉澤弥生「アートはなぜ地域に向かうのか—『社会化する芸術』の現場から」『フォーラム現代社会学』18 2019年
- 吉田隆之『芸術祭と地域づくり “祭り”の受容から自発・協働による固有資源化へ』水曜社 2019年
- 吉本光宏「トリエンナーレの時代—国際芸術祭は何を問いかけているのか—」『ニッセイ基礎研究所報』58巻 2014年
- David Throsby *Economics and Culture*, Cambridge University Press 2001年（中谷武雄、後藤和子訳『文化経済学入門—創造性の探究から都市再生まで』日本経済新聞出版社 2002年）
- Jane Jacobs, *Cities and the Wealth of Nations: Principles of Economic Life*, RandomHouse 1984年（中村達也・谷口文子訳『都市の経済学 発展と衰退のダイナミクス』TBSブリタニカ 1986年）
- Robert D. Putnam, Robert Leonardi, Raffaella Nanetti, *Making democracy work: civic traditions in modern Italy*, Princeton University Press, 1994年（ロバート・D・パットナム『哲学する民主主義：伝統と改革の市民的構造』河田潤一訳 NTT出版 2001年）